

クラシック巡礼 4

# モーツァルトの旅

サイト掲載: [www.i-s-m-kk.co.jp/](http://www.i-s-m-kk.co.jp/)

2018年 10月20日

別当 勉

<betobetoven@mail2.accsnet.ne.jp>

## プロローグ

### クラシック巡礼：モーツァルト

2011年11月27日、2014年12月29日、2018年9月16日改 別当 勉

#### その1

こんどは、とばしてはいけないモーツァルトにしなければならない。

昔は、モーツァルトは好きでもないし嫌いでもなかった。ただ、最後の作品「レクイエム」以外、のめり込むような曲に出会う機会が少なかったということが正直な話である。当時の思い出に沿って、そんな私が次第に耽溺<sup>たんでき</sup>することになってしまった経緯を語ろう。

世の中には、筋金入りのモーツァルト・ファンが多い。それはそれで良いのだが、過激でドラマチックな曲が好きではない人々がその多くを占めるのではないか。その所以は、モーツァルトの育ちに依る曲想にあるにちがいない。溢れ出る湧水<sup>あふむきみず</sup>のように曲を書いた天才で、しかも父親コンプレックスの最たる、いわば「巨人の星」の星飛雄馬である。恵まれずに僅かな可能性<sup>わず</sup>を探し当てて世に出た苦労は、無かったにちがいない。父レオポルドが「トンビが鷹を産む」の喩<sup>たと</sup>えどおり、幼少より音楽の英才教育を施し、それに適応する以上にジャックの豆の木のように育ったようだ。だから、父は己の不遇を息子で晴らしたいとの一念から、ヨーロッパ中の大都市を旅して王侯貴族の宮廷を巡り、天才息子を連れてその売込みに奔走したのだ。たいして成功しなかったが、この天才にウィーン、パリ、ローマ、ミラノ、フィレンツェ、ナポリ、ロンドン、ベルリンなどの都市の風俗と享楽を通した世界観を植え付けた。それが、いろんな色彩をかもす楽曲の創作に結びついたといっても過言ではない。他の楽才たちと比較すると、オペラに数々の名曲を産み出したことは飛び抜けている。これは、当時、オペラブッファ<sup>はや</sup>が流行っていたイタリアへの旅行が大きく物を言っているのではないか。ウィーンに居付いた後輩のベートーヴェンは、オペラはたった1曲しか作曲しなかった。聴衆のニーズが大きかったのにも拘わらず。

そんなモーツァルトであったが、オペラの物語では不可欠な生と死、悲恋<sup>ひれん</sup>、戦争などを一言であらわす『劇的』ということ自体、どんなものか余り考えることがなかったとしか思えない。ただし、35歳の天<sup>わか</sup>さで死ぬ最後の1年を除かなければならない。僕の独断偏見と批判されるかもしれないが、映画「アマデウス」を改めて観<sup>み</sup>ればわかるだろうし、以降の記述でご理解を願いたい。

## クラシック巡礼： モーツァルトの旅

2018年10月20日 別当 勉

### 【最初の旅】

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは、1756年にザルツブルグで生まれた。ザルツブルグとは、塩（ザルツ）の砦（ブルグ）という意味である。つまり、岩塩の産地が近くにあり、塩の仲買・貿易で潤っていた。街の中心を流れているザルツァッハ川がドナウ川に合流して、結構な水上交通の要衝として機能したことも幸いしている。だから、領主（選帝侯）は何をしなくても国の財政はゆるぎなく、安定した経営ができていた。今で言えば、シンガポールのような都市であったとも言えよう。しかし、領主が国王を名乗れなかったのは、ウィーンの強大なハプスブルク帝国（オーストリア帝国）の傘下にあったからである。

ザルツブルグ市街地



<http://www.ne.jp/asahi/sugiyama/sorcer/salzburg>

アマデウスが3歳の時には、姉のナンネルが弾くチェンバロの音に興味を示し、幼い指で三度の和音をたたいてうっとりしていたという。それに気づいた父親のレオポルドは瞠目し、さっそく、イロハから音楽教育を施したら、その学習の速さには再度眼を剥いた。しかも、しががない田舎町の一宮廷音楽家レオポルドの曲を湧きいずる泉のように弾くではないか。親馬鹿でも、こいつは神童だ、神様が恵んでくれた、と感じてもしかたない。生まれた6人の子供のうち4人は乳幼児のうちに亡くなって、淋しい想いをしてきたレオポルドにとっては、まさに恵みの機会となった。この子を世に出せば、自分が果たせなかった夢が叶うと思ひ込んでしまった。

### モーツァルト一家

ヨハン・ボーンネク・デッラ・クロウチェ作

パリ/1781年(25歳)完成

1778年7月没の母は、絵画中肖像画として掲示。

母アンナ・マリア



姉ナンネル

アマデウス

父レオポルド

そこで、最初は1761年、バイエルン侯のミュンヘンに出向き、アマデ

ウスは宮廷劇場で初めて聴衆に5歳の童子の妙技を披露した。レオポルドは旅をして有名な宮廷で、とにかく場数を踏ませることが何よりも肝要と、アマデウスの訓育に情熱を注いだ。すなわち王侯たちに名を売ることが第一で、彼らの嗜好<sup>しこう</sup>を肌身で学ばせ、彼らのニーズに応じた作曲をするように仕込もうとしたのだ。当時は、演奏だけでは有名にならない。王侯たちは、新作に期待しているのである。現代のように、数十万曲も積み上げられてきた「クラシック音楽」というデータベースが無かったのだ。

## 【ウィーンへ】

1762年になると、思い切って芸術の都**ウィーン**に一家4人で出かけた。アマデウス6歳のときである。伝手を頼って、何とか女帝**マリア・テレジア**に謁見することが出来、欧州随一の絢爛豪華な**シェーンブルン宮殿**でこの幼子にチェンバロを弾かせて、女帝の称賛を浴びた。



シェーンブルン宮殿 <https://www.hankyu-travel.com/heritage/austria/schonbrunn.php>

ザルツブルグの周辺図(現在)



オーストリア帝国の版図: 1740年頃



<http://www.publishinglab.net/items/1749382>

### マリア・テレジア：

ハプスブルク家の家領を継承し、プロイセンのフリードリヒ2世とオーストリア継承戦争を戦う。敗れてシュレジエンを割譲したが、次に外交革命によってフランスと結び、再び七年戦争で戦う。多民族国家であるオーストリア帝国の中央集権化を図るなど、事実上の**女帝**としてオーストリアを統治した。ハプスブルク家督継承法によって家督を相続し、1740年にオーストリア大公妃兼ボヘミア王、ハンガリー王に即位。

演奏後、褒美に真紅の大礼服を賜り、そこで、この童子は女帝に抱き着いてキスの雨を降らして周りをドギマギさせた。同い年の皇女：マリー・アントワネットには、サロンで転んだときに抱き起され、親しくなりすぎて「大きくなったらお嫁にしてやるからね」とふざけたらしい。真偽のほどは別にしてもエピソードは果てしがたい。しかし、元来、人見知りしないアマデウスだった。

この頃に、礼服を纏った様子は有名な肖像画として残っており、それについて小林秀雄の随筆「モーツァルト」に鋭い記述が載っている。

—— この失語症の神童には、いかにもしっくりと見えたのである。其処に、「永遠の小児モーツァルト」という伝説が出来上る。彼が、驚くべき神童だった事は疑う余地がなく、従って、いろいろな伝説がこれに付き纏うわけだが、その中で最大のもの、一番真面目臭ったものは、恐らく彼が死ぬまで神童だったという伝説ではあるまいか。 ——

少年時代のモーツァルト



<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ここで、「失語症」という言葉が気にかかる。たぶんに、アマデウスは余りの音楽才能に恵まれたから、父はそれを伸ばそうと必死になり、いまでは義務教育たる一般的なもの、国語（特に文学）、算数、理科、社会（特に歴史）などを受ける日々が無かったのだ、とうかがえる。アマデウスは、言ってみれば音楽にだけ偏っていたにちがいない。確かに、5歳から22歳頃まで、父の引導に従って楽曲の演奏と作曲で勝負する武者修行的な旅ばかりだった。

そういう私も、数学がこよなく好きだったから、高校生になって下手くそなラブ・レターを書いた記憶があり、私も「失語症」だった。恥ずかしいこと限りない。つまり、文学に浸る時間をつくらなかった。大学に入ってから、これじゃいけないと感じて、いろいろな小説を読み

### ヨーゼフ二世



だした。社会人になったら、電車通勤のため必ず文庫本を持ち歩いて、読みに読んだ結果、本巡礼のように書き過ぎるほどになってしまった。ただし、およそ40年も要したから、アマデウスのような即効性に比べると雲泥の差がある。

二回目のウィーン旅行は1767年だから、アマデウスは、11歳になり、その成長ぶりは目覚ましく、大人たちを唸らせるどころか飛び抜けた才能を携えていた。女帝の長男であり、音楽愛好家の**ヨーゼフ二世**のお声がかかりでオペラ・ブ

ツファを作曲したほど、もう列記とした一流音楽家になっていた。これが、反ってウィーンの宮廷に寄生するプロのミュージシャン達を用心させ、妨害工作まで受けて上演できなかった。利害が対立したのである。嫉妬よりも敵視されたから、讒言も宮廷内を蛆虫のように蠢いていた。

結果、レオポルドの執拗なアマデウス売込み活動もあいまって、嫌気がさした女帝テレジアは、

「乞食のようななりで、物欲しそうに放浪する一家。モーツアルトの才能に惚れ込んで地位を与えんとする者たちよ、雇うのは、あの天才少年一人でなはない。彼を雇傭せんと欲する者は、父親と姉まで楽士として抱え込む破目に陥るのだ。」

と、ハプスブルク傘下の諸侯に回状して警告した。

[中野雄作「モーツアルト 天才の秘密」より]

レオポルドにとっては、そういった回状までは知らずにハプスブルグ宮廷と貴族たちの冷ややかなあしらいに、天然痘の流行で罹病しても、傷心に暮れながらも、1年半ねばって1769年に帰郷した。親子ともども、今回は挫折した。

私も、同じように40歳過ぎたころ、営業職に就いて訪問販売活動をしながらか、訪問先からそんな目線を感じたことがあり、その時のわびしさは救いようがない以上に、己のみすぼらしさに魂が泣き出した経験がある。営業マンの他人に言えない悲哀がようやく理解できたのであるから、私としても、人生訓として大きく役立ってきた。だから、レオポルドの傷心度には同情を禁じ得ない。一方、アマデウスはそのようなことに盲目にさせられたがために、やがての単独でのパリ活動で悲惨な想いを体験してしまう。ところが、作曲にその翳がさして、燦然たる名曲たちが産まれた所以ともいえるのだから、創作芸術にかかる才能の開花には欠かせないことなのかもしれない。逆に、ウィーンの宮廷音楽家として雇われていたアントニオ・サリエリなどの音楽家らは、宮中にすがりついて安住した替わりに駄作だらけの作品が残され、歴史の片隅に塵芥のように捨て置かれてきた。

マリア・テレジア



<http://www.neaktuality.cz/domaci/marie-terezie-byla-v-praze-korunovana-ceskou-kralovnou/>

## 【西方への旅】

第1回目のウィーン訪問のあと、レオポルドは、一家4人で西方への大旅行を企てた。1763年（7歳）から3年半に及ぶものである。その工程は以下のとおり。

一家4人でドイツ内（ハプスブルグ帝国内）として、  
ミュンヘン、アウグスブルク、  
マンハイム、フランクフルトを  
経て、ベルギーのブリュッセル  
から、フランスのパリへ、  
そしてドーバー海峡を渡って、  
ロンドンに1年3ヶ月の長期滞  
在。帰りはパリを再訪して、フ  
ランクフルト経由で故郷ザルツ  
ブルグに帰投。



[https://fr.m.wikipedia.org/wiki/Fichier:Mozart\\_family\\_Grand\\_Tour\\_Map.png](https://fr.m.wikipedia.org/wiki/Fichier:Mozart_family_Grand_Tour_Map.png)

もう執念としか言いようがない。アマデウスは、7歳から10歳になってしまった。

いま、この3.5年のツアーを組んで日本から4人で行けば、おそらく4～5千万円ほど掛かるであろう。日本からの欧州への往復飛行運賃は25万円/人ほどだから、あまり影響はないが、電車運賃、宿泊料、食事代などの費用はどんどん嵩む。レオポルドはあくせくと貯めてきたお金のほか、息子の出演料や作曲料など胸算用したのであろう。まさに、プロデューサー、営業マン、就活、旅程ガイド、訪問先との調整すべてにおいて、汗だくでこなしたのだ。凄まじい情熱であり、常人の感覚を遥かに超えている。

また、ザルツブルグ大司教のシュラッテンバッハ伯爵の寛容な大度により宮廷音楽家として長期休暇も許され、金銭的にも援助されたという背景もある。この伯爵は文化活動を奨励し、特に音楽には大きな理解を示したという。また、ザルツブルグの広報になるという判断もあったにちがいない。このような政治的後援も無視できない。

パリでは、少年アマデウスの即興演奏、目隠し演奏、初見演奏など姉ナンネルと一緒にコンサートを開いて、大きな評判を得た。8歳にしてヴァイオリン・ソナタ（ヴァイオリン伴奏によるクラヴィーア・ソナタ）曲集を出版することまで出来た。

そして、この幼い学習マシンは、鍵盤ヴィルティオーゾで当代随一と言われていたヨハン・ショーベルトに出会って教えを受け、演奏法と作曲法を吸収し、やがてのピアノ・ソナタや協奏曲の創作の基礎を蓄えた。パリは「クラブサンの都」とも言われて、鍵盤演奏が盛んだった。

ロンドンでは、御前演奏を披露して喝采を浴び、交響曲第1番の創作が始まったのである。  
この後、1年も経たぬうちに、既述のとおりウィーン再訪だから、作曲エンジンが出来かかったアマデウスについて、レオポルドの売込みには拍車がかかった。

## 【イタリア旅行】

作曲エンジンとして、本格NA（自然吸排気）626馬力のアマデウス・マシンが開発された旅であった。

たとえれば、アマデウスという小男

“Mini”に搭載した高出力AIエンジン

により凄まじい作曲マシンが誕生したのだ。このイタリア・ツアー

が無ければ、音楽史に冠たるアマデウス

は存在しない。その後姿を追

い掛けたベートーヴェンですら、怪

しくなる。それほど、当時のイタリア

の音楽界のレベルは高かったのだ。

一言で、私たちは“イタリア・ルネ

ッサンス”だから当然、と片づけて

しまうが、アマデウスという個人だ

けみても、その底深さに胸を打たれてしまう。

ほとんど彼一人で、歴史的には膨大なイタリア

の音楽遺産がドイツ語圏に移転されたことを知ると、鳥肌が立つ。

レオポルドの狙いも天才的（？）な閃きだった。

レオポルドの狙いも天才的（？）な閃きだった。

1回目は、1769年（13歳）、ザルツブルグ大司教の恩情により、箔付けとして宮廷楽

団コンサートマスターという称号（無給）を賜り、父と子は、勇躍して旅立った。

ミラノ、ボローニャ、フィレンツェを経て、ローマに1770年（14歳）に到着した。

ボローニャでは、当代随一の音楽理論家ジャンバティスタ・マルティーニ師（神父）に出会い、音楽史を始めとして、フーガの芯となる対位法や和声法など克明な教えを受けたことは、AIエンジンの知能拡充に大きな貢献をなした。それ以上に、この若者の吸収、学習能力の凄さにマルティーニ師は舌を巻いたそうだ。アマデウスは、この度と別の機会に二度にわたり師を訪れて、教えを受けながらフーガを作曲して披露し、師を驚嘆させた。

そして、ローマのカトリック総本山バチカン宮殿のシステリーナ礼拝堂で、BGMで流れている曲に魅かれ、楽譜が絶

た。アマデウスは、この度と別の機会に二度にわたり師を訪れて、教えを受けながらフーガを作曲して披露し、師を驚嘆させた。

そして、ローマのカトリック総本山バチカン宮殿のシステリーナ礼拝堂で、BGMで流れている曲に魅かれ、楽譜が絶

旅程図



<http://kansai-senior.sumomo.ne.jp/gallery/2014/140315-nozawa/nozawa-Mozart-3-R141002.pdf>

ヴェローナのモーツァルト(14歳)



<https://amadeusplace.blog.so-net.ne.jp/2010-04-29-1>

対門外不出となっている、

アレグリ作『ミゼレーレ・メイ、デウス』（神よ、我を憐れみたまえ）

<https://www.youtube.com/watch?v=i8p2Mf62xVQ>

に痛く感銘を受けた。運よくその演奏に立ち会い、一度聴いただけで、帰宿してから、何と楽譜帳に記譜してしまった。確度は99%だったという。この逸話ほど、アマデウスの**A I エンジン**たる所以を認識させられる出来事は他にない。

また、演奏会でも絶賛を浴びて、教皇クレメンス14世から「黄金拍車勲章」がアマデウスに与えられた。音楽家では史上二人目の荣誉である。

### バチカン宮殿のシスティーナ礼拝堂



<https://matome.naver.jp/odai/2149440779781356301/2149442556690481903>

オペラの都ミラノでは、歌手や演奏家の抵抗に会いながらも、12月にオペラ・セリエ「ボント王ミトリダーテ：K87」を上演し、絶賛を浴びて計20回も上演されたという。しかしながら、A I エンジンにとっては、各都市でイタリア歌劇を観劇して、次から次へとオペラの

手筋を覚えることになったことの方が遥かに大きいことであった。無限の広さ、実は1000テラバイトの記憶容量を持つAI脳味噌に蓄えられていったことが、やがてのウィーンやプラハでの創作歌劇の大成功に結びついた。さらには、ドイツ語圏にオペラの楽しさを植え付け、見事に、文化の移入を成し遂げたが、本人はそんな意識は全く無かったようだ。でも、歴史は、「魔弾の射手」で有名なカール・フォン・ウェーバー（1786-1826）や、楽劇のワーグナーなどに少なからず貢献したことを語ってきている。

**AI:** Artificial Intelligence「人工知能」とは、人間の知的営みをコンピュータに行わせるための技術のこと、または人間の知的営みを行うことができるコンピュータ・プログラムのことである。

最近、世界中で有名になった事例は以下のとおり。

2016年、Google傘下のAIスタートアップ企業「DeepMind」が開発した囲碁AI「AlphaGo（アルファ碁）」が、囲碁世界チャンピオンのイ・セドル氏（韓国）を破りました。当時、AIが囲碁でプロに勝つまでに10年以上かかると言われており、その快挙は「AI（人工知能）」や「Deep Learning（深層学習）」というキーワードと共に世界中のメディアで報じられました。

そしてつい先日、2017年10月18日に「DeepMind」が最新の囲碁AI「AlphaGo Zero（アルファ碁ゼロ）」を発表。「AlphaGo」は、あらかじめプロ棋士の打ち筋を学習し、そこからAI同士の対戦で強くなっていくものでした。しかし、最新版の「AlphaGo Zero」は囲碁のルールを覚えて自己学習（強化学習）のみで棋力を高めていくことが特徴。これまで人間が数千年の創意工夫を経て考え抜いた手筋というデータベースを必要とせず、自己対局を繰り返して3日で「AlphaGo」に100戦全勝、「AlphaGo」の改良版である「AlphaMaster」に100戦89勝するまで成長したそうです。

< <https://www.optim.cloud/blog/ai/ai-deeplearning/> >

アマデウスの場合は、プログラムの仕込みがレオポルドにより行われ、体験学習も旅により誘発されたのだから、レオポルドがアマデウスというAIエンジンの開発者といっても過言ではないだろう。

2回目は、1771年8月（15歳）で、ミラノで祝典劇を上演するためだった。この町の支配者、**フェルディナンド大公**と、モディナの大公の姫マリア・リッチャルダとの婚儀のために、なんとフェルディナンド大公の母マリア・テレジア女帝からの依頼だった。（アマデウスを嫌っていたのに。）つまり、ミラノはハプスブルグ帝国の傘下都市だったのだ。とにかく、当時から歌劇はイタリアで一番の盛んな都市であった。

#### ミラノ スカラ座（1776年焼失、1778年再建）



<https://spn.ozmall.co.jp/entertainment/performance/137/image/detail/849/>

いまでは、世界一といわれている歌劇場「スカラ座」が他を圧倒している。カラヤンやアバドも、わざわざというより、己のクリア（経歴）に箔を付けたく、かつ誘いもあってスカラ座で指揮棒を振ってきた。名ソプラノ歌手：カラスは、その芸名を“アナグラム”にして、スカラ座にちなんでいるのではないかと私は想像している。（すなわち、**スカラス**カラスカラ・・・カラス？！？ 英：Scala/Callas）

その祝典オペラは、「アルバのアスカーニョ：K111」と呼ばれるが、大公殿下と公女の臨席の元に上演され、大好評を博し、続けざまに5回も再演されたという。

ところが、レオポルドはフェルディナンド大公に際どくアマデウスの売込みをかけた。大公の宮廷音楽長にいかがですか、と。これに乗った大公は、さっそく母である女帝に手紙で許しを請うた。その結果、レオポルド一行が立ち退いた後に、次のとおり否定的な返答がきて、大公は諦めざるを得なかった。

「あなたは若いザルツブルグ人を自分のために雇うのを求めていますね。私にはどうしてだか解らないし、あなたが作曲家とか無用の人間を必要としているとは信じられません。けれど、もしこれがあなたを喜ばせることになるなら、私は邪魔したくはないのです。あなたに無用な人間を養わないように、そして決してあなたのもとで働くようなこうした人たちに肩書など与えてはなりません。乞食のように世の中を渡り歩いているような人たちは、奉公人たちに悪影響を及ぼすことになります。彼はそのうえ大家族です。」

— 海老沢敏著「モーツァルトの生涯」より —

レオポルドは、この返事を待ったが、長逗留もできず、不安な気持ちでザルツブルグに戻った。結論を知った私たちは、またもや疫病女神の登場に愕然とするのは自然である。女帝は、たくましい偉丈夫いじょうぶの男子が理想だった、たとい雇いの音楽家でも。だが、アマデウスの少年期が旅だらけ故に、体躯の育ちが悪く、“小男”だったことは皮肉としか言いようがない。

20世紀の名指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤンも173cmしかなく、ソプラノ歌手のアンナ・トモワ・シントウと並ぶと、やはり小男に見えてしまう。

ジャズの世界では、帝王マイルス・デイヴィスが169cmで私と同じだから、大男の黒人ばかりのバンドでは、確かに小さい。昨今では、映画“M. I.”（ミッション・インポッシブル）により世界の娯楽映画を牽引している俳優トム・クルーズも、そうである。つまり、世界一の男たちには、小男が少なくないと言いたいのだ。何も、アマデウスに限った特徴ではない。かえって、それ故に彼は世界一の音楽家として名を残したのだとも言える。女帝は、その辺に嗜好しこうは全く無く、音楽芸術に対する愛情も無かったのであろう。

私は、既に“Mini”と喩たとえてしまったが、むかしからミニ・クーパーという英車は駆動性、走行性に優れたミニバンで有名だったから、外形としてアマデウスを当てはめてしまったが、彼の体内には、まさに豪絶なAIエンジンが内蔵されており、目覚ましい成長さなかの最中であつたのだ。が、女帝には、なによりも「安定統治」が一番としか観みえていなかった。すなわち、**文化の隆盛が平和裏に世を治めるのだ**、という政治的理念を持ち合わせていなかったとも言えよう。結果的に、彼女は時代の経過に擦り切れ、後を継いだ長男の**ヨーゼフ二世**の治世になるまで、アマデウスの浮かぶ瀬はなかった。

この4ヶ月の旅を終えて、ザルツブルグに戻ったとたんに、あれほどモーツァルト親子に理解を示した大司教シュラッテンバッハ伯爵が他界してしまった。替わって、ハプスブルグ宮廷



<https://www.amazon.co.jp/R-シュトラウス-4つの最後の歌、他-カラヤン-ヘルベルト・フォン/>

肝入りのコロレド伯爵が後釜になり、この新大司教の経費節減という施政方針は、親子には逆風となってしまった。しかしながら、アマデウスは無給から有給のコンツェルト・マイスターに昇進した。年俸150グルデンだから、現代価格に換算すると、45万円～150万円ほどになるが、中間をとって凡そ百万円程度であろう。月給8万円だから、安すぎる。あとは、作曲料や演奏料で稼げるだろう、と言わんばかり。

当時の通貨相場(諸説あり):

1グルデン(フローリン) = 約3千円 <<https://blog.goo.ne.jp/isobekai/e/3f14a5f2a4b47d4ec0a6225492ba99e5>>

1グルデン(フローリン) = 約1万円 <<http://sky.geocities.jp/pape1625/page008.html>>

第3回目のイタリア旅行は、ミラノで契約(130グルデン)した謝肉祭用第一オペラのためということで、新大司教の了承を得て、1772年10月に出発した。ミラノはコロレドの親元ハプスブルク帝国の衛星都市だから、親子を甘やかすことも、いたしかたない。

こうして、ミラノで完成した歌劇「ルーチョ・シッラ: K135」は、期待以上に大喝采を浴びて、17回も再演された。けれども、レオポルドは、ミラノ大公宮廷の楽長に推薦したアマデウスの処遇については、梨の礫つぶてに大いに落胆した。それでも、諦あきらめないレオポルドはフィレンツェ宮廷にも働き掛けたが、そこも望みが絶たれた。

三度にわたるイタリア旅行により、アマデウスの成長の証を端的に私たちに示すものは、次の名作であろうか。

### ディヴェルティメント(喜遊曲) K136 1772年(16歳)

<https://www.youtube.com/watch?v=HBHwfbIjQU>

これがイタリア旅行で仕入れて、ザルツブルグで創り上げた聴くに耐え得るものであり、かつ、クレモナ訪問で目を輝かせた弦楽器、今でも名高いストラディヴァリウスやガルネリウスという名器に出会ったことも反映されている。

やはり、若いAIエンジンが産み出したものは、余りにも定型的すぎて、情感の揺らぎや深みなどを醸かもす曲が少ない、とも言われてきている。私たちも、幼少時には、そのような体験をしてきたことを思い出す。動物的な食欲と、お化けが潜む暗闇への恐怖などには、敏感だったが。読書本などよりもマンガが一番だった。近親の葬儀においても、涙を流す大人たちをみて、さもありなん程度の感覚である。

## 【母との惜別のパリ】

三度に亘るイタリア旅行後は、4年間もザルツブルグで落ち着いた。と言いたいが、実際は、モーツァルト父子は憂鬱な気分だったという。ウィーンに参詣したり、ミュンヘンで選帝侯から依頼された歌劇を披露するなどが主な出来事である。とにかく、父子は「旅」というアクションの慣性がほどけなかったものとうかがえる。

それでも、アマデウスはザルツブルグ宮廷の音楽の制作に努め、十二分に役割を果たしていた。そんな中で、ようやく私たちに“デジャブ”となる名曲が現れてくる。

### 交響曲第25番 ト短調 K183 1773年(17歳)

<https://www.youtube.com/watch?v=lx2EeX4FOqo>

これは、映画「アマデウス」でも使われた。初めての短調の名作である。光と翳の分別がつかいて、アマデウス音楽の深みが増したというべきか。

そして、レオポルドは、いよいよ痺れを切らしてパリへの旅行を図った。父子の苦手なコロレド大司教への認可申請は、なんとか長年の経験を活かして説得してしまっていたが、リウマチ熱に罹病して動けなくなった。このため、アマデウスに母を付けて旅に出したのであるが。ミュンヘンからマンハイムを経てパリまでの旅程となった。家族に従順な母を伴って、1777年11月、21歳のアマデウスは旅立った。

ミュンヘンでは、バイエルン選帝侯に目通りを許され、宮廷楽士の求職を願い出たが、空きがないということで冷たくあしらわれた。

次に訪れた父の生まれ故郷であるアウグスブルクでは、シュタインのハンマー・フリーゲル（フォルテピアノ）に惚れ込み、以後のクラヴィア曲の作曲に大きく影響する。また、従妹のやんちゃ娘マリア・アンナ・テークラと仲良しになり、かりそめの恋に落ちる。が、彼女への手紙の内容が目茶苦茶であり、歴史的にも「ベーズレ（従妹のこと）書簡」として有名になる。その糞尿譚（海老沢敏氏の表現）には、さすがの私も驚きを隠せない。このため、映画「アマデウス」では、彼が素っ頓狂な態度で登場して世界中を驚愕させたが、それを否定できないほど、アマデウスの外面性がベーズレ書簡を基に明らかにされたのだ。

その手紙の一部を掲げると次のとおりである。

「最愛のベーズレ（従妹）ちゃん、子兔ちゃん！ ぼくはきみの大切なお手紙、まさに拝受、折受しました。

そして叔父さん、救父さん、叔母さん、兎母さん、それにきみがとてもお元気だって、さっとわかりまし

黄金拍車勲章をつけたモーツァルト(21歳)



<https://amadeusplace.blog.so-net.ne.jp/2010-04-29-1>

た。まがりました。ぼくたちもおかげさまでとっても健康、犬公です。・・・

・・・ そうだ、誓って、きみの鼻の上にウンコするよ。そうすりゃ顎まで垂れるでしょう。時に、きみのスプーニ・クーニ（おそらくウンチとオシッコ）はすみましたか？ ——なんだった？——もしもまだぼくのこと好きなら——そう信じているけど！ それならなおけっこう、けっこうそれならなおね！

そうですよ、この世はそんなもんで、財布を持っているものもありや、お金を持っているものもいます。きみのは誰のため？——ぼくのためじゃない？ ぼくはそう思ってる！ でも今じゃなおさらむずかしいね。・・・でもそこでなにをしているの？——なに？ なんでもないって！ スプーニ・クーニのこと訊いてるほかはね、ほかのことは訊いちゃいない、それだけだった？・・・さて、お休みなさい、ベッドの中に、大きな音をたててウンチをして下さい。ぐっすりとおやすみ、お尻を口にくっつけてね。ぼくも眠えむりに行って、ほんの少しぐったり眠りましょう。明日、ぼくたちのお利口に喋り、まくりましょう。・・・とにかくさよなら。ああ、ぼくのお尻が火のようにほてってきた！ こりゃいったいなんなのだろう！ ——きっとウンコが出たいのだろう！ そうだ、ウンコだ。お前のことはわかっているし、見もしているし、嗅いでもいるよ！・・・」

これが名高い一連の「ベーズレ書簡」の第一信なのである。はやくも、語呂合わせ、駄洒落、軽口が、そして排泄物に関する表現が充満しているのが分かる。こうした軽妙で言葉の類似した響きをみごとにあしらった手紙は、日本語にはまったくと言ってよいほど訳せないものである。

海老沢敏著「モーツァルトの生涯」より

1777年末に、マンハイムに到着してからのものであり、こういった書簡が10通以上も残っているという。後に、姉ナンネル宛にも、姉の婚約が決まってから、これに近いきわどい書簡も見つかっている。これは具体的に何を意味しているのか？ 思うに、アマデウスは仲良くなると次第に、調子に乗って度を越えた会話をして、毎度のように相手を笑わせていたのではないだろうか。それが昂じると手紙に書いても彼女の方はすなおに受け取ってしまう。

次に出てくるアローイジアのような近寄り難いオーラと伶俐な態度をしている女性に対しては、ふざけることは禁じ手になるから、ベーズレ書簡のようなものは無いようだ。

要するに、彼はふざけることがこよなく好きだったと言えよう。体内にA Iエンジンを内蔵して、しかも、欧州各地の宮廷巡業で<sup>つちか</sup>培った香り豊かな<sup>みやび</sup>雅を曲想に<sup>かも</sup>醸しているのに、それが彼の態度や姿勢に現れなかった。アマデウスの行動パターンにおいては、英知をひけらかす作曲家という印象は、皆目なかったと認識すべきである。現代のお笑いタレントそのものと言っても良いかもしれない。大学教授みたいな紳士ハイドンとは正反対だったのだ。

アマデウスの才能は<sup>そこ</sup>音楽だけだった。

## アロイージャ



<https://matome.naver.jp/odai/2136381067592976901/2136391570612532403>

次のマンハイムは、君主政治の伝統的な街であり、音楽も奨励されている絶好の都市だったが、アマデウスは訪ねたウェーバー家の4人姉妹のうち、次女**アロイージャ**の美形に目を奪われた。16歳の彼女は、ソプラノ歌手の卵であり、見事な歌いぶりに耳まで<sup>たかぶ</sup>昂った。いつのまにか、彼女に近づいて持ち前のクラヴィア伴奏で<sup>じっこん</sup>昵懇になってしまった。へたくそな恋の技をしかけ、なんとかアロイージャの気を引いて有頂天になり、求職活動など棚に上げ4ヶ月余りも滞在することになったが、その間、母は心配して父に何度も手紙で苦情を報告した。父とアマデウスは、旅費の無駄使いだとか、てんやわんやの文<sup>けんそう</sup>通喧騒に発展して、母からの説得もあり、ようやくパリに向けてマンハイムを後にしたのである。

このウェーバー家の三女がコンスタンツェというが、やがて、ウィーンにてアマデウスと結婚する。最愛のアロイージャにふられたのだが、そんな心の痛手は、ふざけ體質のアマデウスの<sup>てんしんらんまん</sup>天真爛漫な性格で隠されてしまったようだ。だから、後に「<sup>のち</sup>ドン・ジョヴァンニ」のような歌劇を平気で作れたのだのではないだろうか。ドン・ジョヴァンニとはイタリア語であり、元々はスペイン伝説におけるドン・ファン（好色男）のことである。

「不滅の恋」にこだわったベートーヴェンではあり得ない話でもある。

[参考] スペインのドン・ファン伝説は簡単なもので、プレイボーイのドン・ファンが、貴族の娘を誘惑し、その父親(ドン・フェルナンド)を殺した。その後、墓場でドン・フェルナンドの石像の側を通りかかったとき、戯れにその石像を宴会に招待したところ、本当に石像の姿をした幽霊として現れ、大混乱になったところで、石像に地獄に引き込まれる。

この物語は、日本語では「ドン・ファン・テノーリオ」(Don Juan Tenorio)としても紹介されている。

「Don Juan」は日本語では、英語風に「ドン・ファン」(Don Juan)、イタリア語風に「**ドン・ジョヴァンニ**」(Don Giovanni)、フランス語風に「ドン・ジュアン」(Don Juan)とも呼ばれる。いわば、好色男である。

<<https://ja.wikipedia.org/wiki/ドン・ファン>>

マンハイムに滞在しながら、ドゥジャン (Ferdinand Nikolaus Dionisius Dejean, 1731 - 97) から依頼されたので、アマデウスは2つのフルート協奏曲 (K. 313, K. 314) と、3つのフルート四重奏曲 (K. 285, K. 285a, K. 285b) を書くことになった。謝礼は200フローリン (約160万円) であった。

その5曲のうち最初の作品は、耳から鱗うろこの傑作で、この巡礼では跳ばせない。

### **フルート四重奏曲ニ長調 K285 1777年(21歳)**

<https://www.youtube.com/watch?v=aW6mruNFrQs>

これら3つのフルート四重奏曲について、音楽史家で有名なアインシュタインは、「モーツァルトは、全く気乗りがせず、高度の飛翔をしなければならぬとは感じていなかった」という。ただし最初のニ長調 K285 だけは完全な価値を持っているとも言っている。

ドゥジャンはボンに生まれ、東インド会社に長く勤めた。また医師でもあった。裕福でヨーロッパ各地を気ままに旅行し、ちょうどこの頃マンハイムに滞在していた。音楽愛好家で、フルートが上手だったらしい。〈<http://www.marimo.or.jp/~chezy/mozart/op2/k285.html>〉

それほど、気張らずに書いたものが、未来永劫、フルート奏者に愛されるのだから、私たちは天才の凄さに、思わず舌を巻いてしまう。

マンハイムからパリまでは、いつものとおり、乗り心地の悪い駅馬車(郵便馬車)で行ったが、途中で土砂降りに会い、ずぶ濡れで着いたという。アマデウスは、早速、父の友人であるグリム男爵を通じて活動を始めたが、思わしくなく散々な結果ばかりであった。かろうじて、交響曲第31番「パリ」ニ長調 K297のコンサートは果たせたものの。仲の良かったアロイージャとの文通も途絶え、失恋した。財布の中もさびしくなった。

どしゃぶりの悪天候のもとでの、長旅の疲れが癒えない母を、居心地の悪い相部屋の木賃宿に残したままで、アマデウスはパリでの作曲と演奏活動にいそしんだ。何週間も、母はただ独り待っただけの毎日に気も体も、次第に衰弱していった。ついに、息を引き取ってしまった。多感な22歳のアマデウスの魂は、さすがに地獄に落ちた。仕事も、恋も、母も失うという三苦さいなに苛まれ、管理魔の父のことすら、その存在の有難さすら想いはかることさえ出来なかったのだ。

そんな彼の魂の傷跡きずあとがうかがえる名曲は、次のヴァイオリン・ソナタであろうか。

### **ヴァイオリン伴奏によるピアノ・ソナタ 第28番 ホ短調 K304**

I. Allegro ホ短調 2/2 ソナタ形式

II. Tempo di Menuetto ホ短調 3/4 三部形式

[作曲] 1778年(22歳) マンハイム〜パリ

<https://www.youtube.com/watch?v=Vx6uDDJQ4Ww>

この曲を聴くたびに、母の死による彼の魂の亀裂の深さに、思わず込み上げてくる。

どうしても、次のようなアマデウス22歳の心の嘆きが沁み渡ってくる。

## [22歳の惜別]

お母さん、どうしてこんなに悲しいのでしょうか。

いなくなってから、言うのも悲しいです。

僕は、必死になって、毎日、パリの人々にあちこちで会って演奏をして、

活動しているのですが、余り好ましい結果が得られません。

そのために、あなたを一人ぼっちにさせてしまったことは、申し訳なく、<sup>ざんげ</sup>懺悔に堪えません。

いつも、僕達をやさしく見守って<sup>はぐく</sup>育ててくれたお母さん。

あの頑固で独断専行のお父さんに愚痴も言わず、ひたすらに<sup>したが</sup>順ってきましたね。

そんなお母さん、僕にも、<sup>さしず</sup>指図がましいことは一言も言わず、僕を自由に

振る舞わせてくれました。

おかげで、パリでは、僕にお父さんの厳しい監視の目が届かず、僕らしく行動出来ました。

そんなことを言っても、いまや、仕方ありません。

あなたの家族全員を包むようなつつましい<sup>まなざ</sup>眼差しは、生涯、忘れることが出来ません。

どうか、安らかに永眠してください。

.....

僕は、これから独り立ちして、きっと有名な音楽家になってみせます。

フォークの名曲、吉田拓郎作詞・作曲「どうしてこんなに悲しいんだろう」と、伊勢正三作詞・作曲「22歳の別れ」の表題が、瞬間的に頭に浮かんで流用してしまった。1970年代に青春を過ごした人々には理解されることを願って。

おそらく、傷心のアマデウスをみるのは、ザルツブルグに帰ってきたときであろう。はた目には、父や姉を<sup>おもんぽか</sup>慮る態度を見せながら、本人も気付かないほど心の深層に、そこはかかない淋しさを宿しながら。

そして、世界中のモーツァルト・フリークが、これを知らないクラシック・ファンに会ったら、途端に見下す態度をとってしまうほどの見事な傑作を産み出した。私も、実は、この巡礼を始めてから、かすかなデジャブを基に何度も聴き入っているから、同罪かもしれない。

### ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲 K364 1779年(23歳)

#### <協奏交響曲:シンフォニア・コンチェルタント>

<https://www.youtube.com/watch?v=OKgS5LoSQPw>

確かに、第2楽章アンダンテはヤング・アマデウスの<sup>みぞう</sup>未曾有の絶品である。母の死が尾を引いて、生来のふざけ体質の奥底にある魂がその痛みに泣いている。しかも、旋律はやるせない<sup>わび</sup>侘しさを<sup>たた</sup>湛え、その<sup>かげ</sup>翳がさしている。新たな芸境に到達したと、断言できよう。

## 【ザルツブルグでの鬱憤と巣立ち】

1779年1月に、故郷ザルツブルグに帰郷したアマデウスは23歳になった。

彼は、母を死なせて落ち込んだ気持ちを奮い立たせたが、父レオポルドはなにかにつけて息子を譴責したから、二人の仲は次第に険悪になっていった。音楽に思いやりがない大司教コロレドとは、以前から冷戦状態にあり、益々、アマデウスとは相容れぬ関係になって行き、「いつでも出てってやる」という捨て身の気持ちまで抱くようになっていった。これは、23歳の若者なら、当然である。私の青春時代もそうだった。アマデウスの場合は、作曲家としてのしっかりした自信があったから、余計にそう考えたのだろう。しかし、一抹の不安として、定職先があいまいだったので、彼はおのれの志望を鬱々と韜晦するしかなかった。

それでも、父は八方手を尽くして、定職が無い息子のために宮廷オルガン奏者という職を用意していた。年俸450グルデン（約360万円）まで付けてくれたのに。

アマデウスに、そんな鬱憤を晴らせられる出来事が起きた。ミュンヘンのバイエルン選帝侯からの要請で、オペラ作曲が舞い込んできてから、狂喜した。コロレド大司教は、またもや選帝侯テオドール伯爵からの要請にいやいやながらも許容せざるを得なかった。ハプスブルグ家傘下の各都市の君主どうしは、互恵の関係は崩せない。それよりも、アマデウスの人気に、音楽に無関心のコロレドは切歯扼腕したかもしれない。

ウィーンよりも近いミュンヘンへは、初めて独りで出かけた。その歌劇「クレタの王イドメネオ：K366」は絶賛を博した。と書いてしまえば、それまでであるが、実際は台本に沿って50曲以上を書かねばならない。だから、AIエンジンを擁していると私は言った。物凄いエネルギーと耐久性が必要とされるが、彼にはそんなストレスよりもザルツブルグから解放されることに喜悅した。

1780年11月にミュンヘンに到着した。

同月に、なんと、あの疫病女神マリア・テレジアが崩御したのである。これを聞いたアマデウスは、少なからずチャンス到来と密かな夢を膨らませたに違いない。

コロレド大司教は、服喪のためにウィーンにいたが、アマデウスが予定を大幅に超えてミュンヘンに4カ月も長期滞在したから、腹が立ち、手元、すなわちウィーンに強制的に呼び寄せて厳重に監視しようとした。しかしながら、アマデウスの魂胆はちがった。女帝の跡継ぎのヨーゼフ二世に会える。自分を真に理解してくれる新皇帝がいる。内心、ほくそ笑んだ。

ウィーンに行くと、コロレド大司教に大仰に這いつくばりながらも、いつのまにか、ちゃっかりとサロン・コンサートやクラヴィアのレッスンで稼ぎ出した。自分の価値を問えるのは、ウィーン市民しかないと大きな自信を抱いたとしても、不自然ではあるまい。

ついに、大司教からは勘当されて、ウィーンの街を彷徨<sup>さまよ</sup>ったが、再会したアロイジアの母ウーバー夫人の家宅に間借りして、そのうちに三女のコンスタンツェと仲良しになり、婚約するまでに発展した。レオポルドには許しを乞うたが、すなおに許容はされなかった。手紙でのやりとりで、やむなくというか息子の強引さに引きずられて、容認してしまった。

#### コンスタンツェ



<https://matome.naver.jp/odai/2136381067592976901/2136391570512531303>

そして、1782年8月に二人は結婚した。アマデウス26歳で、コンスタンツェ20歳であった。これで、完璧に**アマデウスの巣立ち**になった。音楽嫌いのザルツブルグ大司教と、管理魔の父から独立したのである。これからの、たった10年間で音楽史に燦然と輝く傑作群を創り出すことになる。

**レオポルド製作所の凄まじいAIエンジンが、独りで唸って爆音を上げながら作動し始めたのだ。**

もう、誰にも止められない、どこに行ってもAIタイプだから、新たな楽曲手筋はすぐに消化して使いこなしてしまう。

一方、父は、落胆のどん底に落ち込んだ。これも、いつかは来るものだが、何のおこぼれもない。淋し

かったにちがいない。

アマデウスの旅は、一応、ウィーン定住が終着駅となるが、そこを起点として、このAIエンジンは、ボディが壊れるまで旅を続けるのだから、始末に終えない。

#### 【自作品目録】

1784年(28歳)2月から、アマデウスは「私の全作品目録」を付け始めた。最初は、ピアノ協奏曲第14番K449である。ウィーン定住してから4年目であり、コンサート、レッスン、作曲と売れっ子の多忙の時期だった。ケツフェル目録における曲数に比較すると、凡そ全曲の1/3が克明に、最初の1行のスコアのサムネイル(見出し)付きで記録されているようだ。

なお、ケツフェル：Kという作品番号は、ルードヴィッヒ・フォン・ケツフェルによる調査研究の末に、1862年に「ケツフェル目録：年月日順」が出版され、そこで使われたものである。これが、アマデウスの作品を指定する場合に都合よく、長年使われてきた。しかし、以後の研究者たちが、それら以外の作品を掘り出したり、順序の違いを見つけたりしたから、いろんな付帯記号が付いてきている。私は、面倒なのでケツフェル番号をそのまま使っている。

しかしながら、ようやく、アマデウスは自己管理に気付いたのである。アマデウスより14歳若いベートーヴェンは、最初からしっかりと作品番号：Opusを付けたが、これは多分に印刷出版社とのやりとりで生じたものと言える。アマデウスの時代は、バッハ以来の「手書き写譜」という手段が頒布の常套だった。だから、リハーサルに先立ってオーケストラ・メンバー数十人に配る楽譜も写譜に依ったように、「写譜屋」なる職人が大勢いたことになる。ちなみに、アロイージアやコンスタンツェのウェーバー家も、随時に招集される写譜職人でもあった。

アマデウスも、父の教鞭で小さいときから楽譜を綺麗に書かされた。このため、とにかく彼はこまめに几帳面に楽譜を書いたことは、歴史的にも有名である。実は、写譜屋に渡すオリジナルになるから、見やすく書かざるを得なかった。写しが間違わないように。

ベートーヴェンの時代になると、僅か10年ほどの経過なのに、印刷技術がリトグラフ(1798年)の登場により、その最初の応用が楽譜になった。コストが高すぎる活版印刷にとって替わり、適用範囲が大幅に拡大したのである。経済性が大幅に改善されたことが大きくものを言った。彼の手書きの楽譜は、アマデウスと比べると訂正・修正が入り乱れて、きたない。まるで司馬遼太郎の原稿みたいである。実は、印刷出版社が、きれいに清書した「印刷原稿」を原作者に「校正」と称して確認にくるから、という実態が影響したのであろう。肉筆による写譜では、頒布数も限られる。それゆえにミスも簡単に個別に訂正できるが、印刷はいったん何百部も刷ってしまったからでは、訂正が困難で、やるとしても紙も工数も無駄になり、不経済きわまりない。

アマデウスは、父に、とにかく丁寧<sup>しつげ</sup>に書くよう躡<sup>しつげ</sup>けられた。これが、AIエンジン生成の一つの大きな要因になったのだと、私は考えている。学習の基本は、写しでもいいから、とにかく書くことが一番である。すなわち、人類の文明は「真似<sup>まね</sup>」から始まったのだから。

小林秀雄の「モーツァルト」に、またまた、素晴らしい名言がある。

模倣は独創の母である。唯一人のほんとうの母親である。二人を引き離してしまったのは、ほんの近代の趣味に過ぎない。模倣してみないで、どうして模倣出来ぬものに出会えようか。

まさに、私も五味康祐の「音楽巡礼」を真似してきて、いつのまにかここまで書いてきてしまった。私なりに独創的に書けたのだろうか、それは読者の判断による。

## クラシック巡礼:モーツァルト その2 2011年11月27日、2014年12月29日、2018年9月16日改 別当 勉

最初の味わい深い出来事は、大学2年の時、アルバイト先で知り合った先輩A氏である。この人は東京医科歯科大を出てインターン中の歯科医タマゴだったが、修了して目出度く就職・結婚した。新婚家庭に招かれ、若奥様の手料理をご馳走になり、ついでに、新調したばかりのピカピカのステレオでかけていただいたものがモーツァルトだった。A氏は、モーツァルト信者であるから、当然でもある。ただ、僕が結婚祝いに贈ったチャイコフスキーのピアノ協奏曲、カラヤンとリヒテルが激突した名演奏であるが、A氏は「有難う」だけの返事に肩透かしをくれた。余り興味がないけど、という柔かな返答と感じられた。

当然ながら、A氏は極めておだやかな人柄である。それまでの付き合いでも、やんちゃにモーツァルトを貶す僕に怒ることなんか皆無だった。しかし、モーツァルトを聴かせて何かしかの反論をしてきていることがさりげなく感じられた。

そう、かけてくれたLPが、当時のレコード芸術誌が特選した、ブタペスト四重奏団+1の「弦楽五重奏曲第4番 <sup>ケツフェル</sup> K 5 1 6」であった。<sup>うるわ</sup> 美しい感じの曲で、一度だけなのにずっと記憶から消えたことはない。このため10年前ぐらいから、人生がひと段落したので、このCDを探し始めたが見つからない。他の楽団のものはあったが、ブタペスト・カルテットに<sup>こざわ</sup> 拘ったから無視。そして、今年になってリバイバルCDが<sup>はや</sup> 流行り始め、やっと手に入った。そして、あのシーンをもう一度じゃないけど、ほんとに遠い過去との遭遇に<sup>かんきわ</sup> 感極まった。A氏の心の声が「松本君、モーツァルトもいいだろう？ すなおに聴きなさい。」と言っているようで、それをあらためて噛みしめ、すなおに頭がさがった。

### <アマデウス特急>

この巡礼のエピソードにおける名曲は次のとおり。

**弦楽五重奏曲 第4番 短調 K516 1787年(31歳)**

<https://www.youtube.com/watch?v=Z0xNH2-eJ0s>

<アルバン・ベルク四重奏団 + マルクス・ヴォルフ(第2ヴァイオリン)>

アマデウスのウィーン定住の生活では、ウェーバー家の三女であり、アロイージアの妹のコンスタンツェと結婚している。高速で飛ばしても安定した音楽家生活を送っていた。

この曲の第1楽章については、有名すぎる小林秀雄著「モーツァルト」における名文を掲げることが一番となろう。

確かに、モーツァルトのかなしきは疾走する。涙は追いつけない。涙の裡に<sup>うち がんろ</sup> 玩弄するには美すぎる。空の青さや海の匂いの様に、「万葉」の詩人が、その使用法をよく知っていた「かなし」という言葉のようになし。こんなアレグロを書いた音楽家は、モーツァルトの後にも先にもない。まるで歌声の様に、低音部のない彼の短い生涯を駆け抜ける。

私が19歳の若僧の時には、このように感じられてはいなかったが、何故かうるわしく鮮明に脳裏に残っていた。逆に言えば、聴くたびに、あの場面などが走馬灯のように次々と頭の中で、<sup>たと</sup>喩えていうなら「**アマデウス特急が疾走**」してくるのである。

弦楽五重奏の六曲というのは、K174、406 (516b)、515、**516**、593、614の「弦楽五重奏曲」である。これらはいずれもヴァイオリン2、ヴィオラ2、チェロ1のアンサンブルで、弦楽四重奏にもうひとつヴィオラを加えた形で厚みを<sup>た</sup>湛える五重奏曲で成功した。

弦楽五重奏曲 変ロ長調 K174 (1773年17歳)

弦楽五重奏曲 ハ短調 K406 (516b) (1782年原曲 1787年編曲)

K388 (384a) のセレナードからの編曲で、K515とK516の二曲の五重奏曲とセットの三曲目として出版するのが目的だったよう。

弦楽五重奏曲 ハ長調 K515 (1787年31歳)

**弦楽五重奏曲 ト短調 K516** (1787年31歳)

弦楽五重奏曲 ニ長調 K593 (1790年34歳)

ヨハン・ペーター・トストのために書かれた。K515、K516とともに弦楽五重奏曲の最高傑作。

弦楽五重奏曲 変ホ長調 K614 (1791年35歳)

この曲もヨハン・ペーター・トストの依頼による作品で、モーツァルト最後の室内楽曲。

K516のクインテットが作曲されたのは、1787年(31歳)である。ザルツブルグで病床に伏せていた父レオポルドがこの年の5月に、67歳で淋しく他界した。その直前に書かれたらしい。父の末期が影響したのかどうかかわからないが、K516の第4楽章は、彼の嘆きを<sup>ほうふつ</sup>彷彿とするような主題で始まる。これを聴くと、アマデウスの心魂の落ち込みがわかる。しかし、それを打ち消すようなト長調に変じて、明るく優雅に体裁をつけて周囲を紛らわすような彼の得意技に<sup>わざ あっけ</sup>呆気にとられる。

この年に、ニュース記事のような歴史的な出来事があった。16歳の少年ベートーヴェンがアマデウスを訪ねてきて、フォルテピアノによる少年の即興演奏を聴いたという。あとで、アマデウスは隣室にいた友人に

「彼に注目していたまえ、いつか世間をさわがせることだろう！」

と予言したそうだ。(海老沢敏著「モーツァルトの生涯」より)

ベートーヴェンが22歳(1792年)でウィーンに本格的に上京した時には、アマデウスは前年に他界していた。

### クラシック巡礼:モーツァルト その3 2011年11月27日、2014年12月29日、2018年9月16日改 別当 勉

それから、A氏とは二度と再会する機会は無かったが、思い出は鮮明だったし、かえって、少しずつモーツァルト許容度が芽生えたのである。最初買ったLPは、ピアノ・ソナタ11番（トルコ行進曲付）<sup>ケツフェル</sup> K 331が刻まれたレコードである。なにげなく買ったから、演奏家は選んでないが、確かクララ・ハスキルかリリー・クラウスか、いやイングリッド・ヘプラーだったと思う。今のCDラックには、我が国が誇るべき世界のピアニスト、内田光子のピアノ・ソナタ全曲、ピアノ協奏曲全曲が並んで、その中に埋もれている。この曲は、軽やかな第3楽章のトルコ行進曲に興味を持ったが、聴き始めたら第1楽章にのめり込んだ。物凄くシンプルで優しく郷愁を誘い、しかも第一主題後の変奏がリズムカルに6回も変貌するのだ。大小のビー玉が転がるような感じがしてしょうがない。世界トップレベルの内田光子も<sup>みずみず</sup>瑞々しく、学校の先生みたいに絶妙に普通に弾いている。彼女は、僕と同年であるが、今やロンドン在住のトップ・プロで活躍している。容姿端麗、一重まぶたで自信がなさそうな暗い目線がいい。彼女のプロ・デビューは、ロンドンで、リリー・クラウスに<sup>あこが</sup>憧れたのかどうかしらないが、モーツァルトから始めた。先駆の巨匠マルタ・アルゲリッチはショパン、リストなど多様であったから、この選択は的確だったと思う。

#### <アマデウスの<sup>いに</sup>憩い>

その構成はつぎのとおり。

#### ピアノソナタ 第11番 K331

第1楽章 アンダンテ・グラツィオーソ (Andante grazioso)

イ長調 6/8 主題と6つの変奏

第2楽章 メヌエット (Menuetto) イ長調 トリオはニ長調

第3楽章 変則的なロンド (Alla turca)

アレグレット (Allegretto) イ短調 2/4 複合三部形式

<https://www.youtube.com/watch?v=NvG3epr90HI>

<イングリッド・ヘプラー(全曲)>

アマデウスのピアノソナタは、K 279が第1番であり、1775年、19歳の時である。この最初の曲から続けざまに6曲を書き上げた。それらを「ミュンヘン・ソナタ集」と呼ばれるようだ。

第11番イ長調K 331は、1784年（28歳）にウィーンのアルタリア社からピアノソナタK 330、K 331、K 332の三連作として出版された。この時点は、コンスタンツェとの新婚生活の中で書かれたから、幸福に満たされた心境がうかがえる。なお、フォルテピアノはウィーンのリッター製のものであったという。

「アラ・トルカ」（トルコ風に）という指定がついた第3楽章は、文字どおりトルコ風の音

楽。トルコの軍楽隊が使う打楽器をイメージしたもの  
みられている。1782年に作曲された歌劇『後宮からの  
誘拐』の中の「近衛兵の合唱」と音型、リズムともそっく  
りの箇所も出てくるようだ。

第1楽章**アンダンテ・グラツィオーソ**（優美にゆっくり  
と）の天国的な風景は、“**アマデウスの憩い**”とも言える。  
語り尽くせないほどの幸せが薫<sup>かお</sup>ってくる。学生時代から、  
穏やかに過ごしたいときには、これを聴くのが一番だった。  
しかも、6変奏も続くので長いから聞きながら、読書して  
も、部屋で雑用をしても邪魔にならない。まるで、そよ風  
のように流れてくる。

いつのまにか、第2楽章のメヌエットに移っても違和感  
がない。見事につながる。

最後が、リズムカルなトルコ行進曲だから、気持ちが躍  
動するけれども、これほど楽しい旋律に囲まれると、その  
日に起きた嫌味<sup>とげとげ</sup>な刺々しい想い<sup>うさんむしやう</sup>など胡散霧消してしまう。

書いた時のアマデウスの気分が、たしかに安寧であるこ  
とが明白である。この曲ゆえに、アマデウスの情感と曲想  
が明らかになってくるから、アマデウスの名曲をコースで  
味わうには、アペタイザー（前菜）としても一番である。これを跳ばすと、アマデウスについ  
て私は解らなくなる。すなわち、私の中では、彼の心の原点なのだ。

#### ワルター製のフォルテピアノ



<https://fpworkshop.exblog.jp/8/>

ワルター製のピアノはモーツァルトやベート  
ーヴェンたちに好んで使われた。とりわけモ  
ーツァルトとの関わりは重要である。1782年  
に彼がワルター製の楽器を購入したことが  
分かっており、その後の彼自身が企画した  
予約演奏会でもこれが使われた。モーツ  
ァルト時代のワルターは、当時の記録によると  
「豊かな鐘のような音、明瞭な反応、強く、豊  
かな低音」が特色で、速いパッセージやオク  
ターヴ連打などによって難しい技巧を好む  
ヴィルトゥオーソ向きの楽器であったと言わ  
れている。

#### クラシック巡礼:モーツァルト その4 2011年11月27日、2014年12月29日、2018年9月16日改 別当 勉

ついでに、内田が演奏したモーツァルトの代表的ピアノ協奏曲第20番：K 466<sup>ケツフェル</sup>をピックアップしてみよう。これは、TVコマーシャルで第2楽章ロマンスが使われ、有名になったが、僕は第1楽章にのめり込んだ。全部で27曲もあるから全部聴取を想像しただけでもぞつとする。僕にとって、その中で一番光ったのが20番だ。というか、モーツァルトのピアノ協奏曲ではめずらしいマイナー（短調）であることが種明かしで、後で判ったのである。不思議な現象だ。曲と演奏は、弾むようなリズムと玉ぎよくのようなスタインウェイ、今聴いても快いかぎりである。カデンツァでは、抑え込まれたダイナミズムが放出される。また、同じCDにカップリングされている21番K467の第2楽章も綺麗なアンダンテであり、「短くも美しく燃え」という映画に使われた。こんな題名、当時はこそばゆくてとてもじゃないけど観る気がしなかったし、「愛してるよ」なんて口から出すこと自体が男を失うほど墮落の果てのように観念していた青い時代だったから。ただ、FMで何度も聴いたのでその憂愁あふに溢れた感じが印象に残った。

そして、2014年の歳末になって、クララ・ハスキルの20番が雑誌の試聴盤に取り上げられていたから、当時の感傷がよみがえり思わず取り寄せて聴いた。ハスキル最晩年のステレオで透明なほど秀逸なデッカ録音である。演奏は、五味康祐が讚美していた第2楽章ロマンスに興味湧いていたので、丹念に聴き込んだ。映画「アマデウス」のエンディングでも使われた第一主題（くつろぎの旋律）のあとの変奏に背筋がしびれた。ハスキルの凄さと五味康祐けいがんの炯眼けいがんに今更ながら驚嘆した。ピアノの粒子が紡ぐ、なんという哀愁か。同時に、2014年冬に80歳で他界したクラウディオ・アバド最後の指揮でアルゲリッチが2013年に録音したものと比べたが、内田光子が可哀そうなほど芸格の違いが明白な演奏である。でも、ハスキルの解釈はやはりズバ抜けている。変奏様式については、ジャズのインプロヴァイゼーションに触発されてきたのかどうかで美観に差が出るのであろうか。鑑賞側も日頃の審美眼けんきんの研鑽をおろそかにはできない。

とにかく、ベートーヴェンもこの第2楽章、特に中間の激しい展開部に注目して研究したと言われているほどの名曲なのだから。

#### <アマデウス・ロマンス>

ここでいうロマンスとは、男女間の恋愛感情ではない。

もともとは、ラテン語の俗化したロマンス語で書かれた物語のことを指していたという。また、音楽用語としては、「叙情的な歌曲あるいは小規模な器楽曲」という意味を持つ。また、ロマンティックという言葉も、時々、誤解されている。南ドイツのツアーで、あのワーグナーに感化されたバイエルン王ルートヴィヒII世が建築した中世の夢のようなノイシュヴァンシュタイン城が見られる「ロマンティック街道」というのがある。これは「ローマへの道」という

ことであるが。日本人の不思議な、身勝手な解釈で何故かロマンティックな旅というふうに興味を持たされてしまう。ツーリストもホントの意味、つまりロマンティック街道はアルプスを南北に横断するから、昔は厳しい旅であったというイメージを、知っていても、ツアー客の想いは敢えて訂正しない。冷や水をかけて商売にならないから。

### ノイシュヴァンシュタイン城(1886年完成)



<https://osmo-edel.jp/column/1775-2/>

そうはいつでも、誤解しすぎてもたまらないほど、いくつものロマンティックな街と風景を堪能できるから、私も家族を連れて直<sup>じか</sup>に行ってきた。その印象が脳裏に焼き付いている。ということで、次に行くとしたら、アマデウスを聴きながら楽しめるだろうと空想してしまう。だから、ここでは「アマデウスの情景」という意味で理解をいただきたい。

### ピアノ協奏曲 第20番 二短調 K466 (1785年:29歳)

第1楽章 アレグロ 二短調、4/4、協奏風ソナタ形式。

第2楽章 ロマンズ(伊:ロマンツェ) 変ロ長調、2/2、三部形式。

第3楽章 ロンド:アレグロ・アッサイ 二短調 - 二長調、2/2、ロンドソナタ形式。

<https://www.youtube.com/watch?v=yM8CFR01KwQ>

<内田光子の弾き振り(全曲):クリーブランド管弦楽団>

この第2楽章の始まりは呑気<sup>のんき</sup>だが、とつとつと語るようなピアノ音がとても美しい。続く変奏こそ、雲の上の散歩のようにこの世のものとは思えない。この部分のハスキルの演奏に、私は見事に吸い込まれたのだ。ミロス・フォアマン監督製作の映画『アマデウス』ではエンディ

ングに使われた。

ところが、中ほどのト短調の中間部の激しいピアノソロの緊張感がきびしい。ベートーヴェンがこの曲のこの部分を好んだようだが、特に、ドラマティックな第2楽章中間部を研究したという。

アマデウスが結婚後に、初めてウィーンを訪問した父レオポルトは息子を訪ね、ウィーンに到着したちょうどその夜、アマデウスの予約演奏会が開かれ、前日完成したばかりのK 466を聴いて、称賛して喜悅したという。なお、予約演奏会とは、現在の前売券販売によるコンサートの原点である。アマデウスはこれに執着した。当時も、人気がないと開催はできないから、自信と覚悟は必須となる。

レオポルトは、実際に息子が大成功しているのを目の<sup>ま</sup>の当たりにすることになる。そして、その驚きを娘ナンネルへ書き送っていて、その中には、**ハイドン**がレオポルトに直接、

**「誠実な人間として神に誓って言いますが、あなたの息子さんは、私が名実ともに知っている最も偉大な作曲家です。」**

と言ったことを伝える手紙もあるという。まさに、レオポルト最高の極楽だったにちがいない。このために、涙ぐましいほど一身をかけて育成してきたのだから。

続いて、**ピアノ協奏曲 第21番 二短調 K467**（1785年）は、次の構成である。

第1楽章： Allegro ハ長調 4/4 協奏ソナタ形式

**第2楽章： Andante** ヘ長調 2/2 三部形式

第3楽章： Allegro vivace assai ハ長調 2/4  
展開部のないソナタ形式

<https://www.youtube.com/watch?v=PcYYUCKXmb8>

<内田光子(全曲):ジェフリー・テイ指揮イギリス室内管弦楽団>

第2楽章は、スウェーデン映画「短くも美しく燃え（1967年）」やアメリカ映画「スーパーマン リターンズ（2006年）」で使われていることでも有名。

さらに、ポップスでも、ニール・ダイヤモンドが1972年にリリースした「ソング・サング・ブルー」はビルボードで1位に輝いたという。

[https://www.youtube.com/watch?v=9\\_Do\\_1xhQ40](https://www.youtube.com/watch?v=9_Do_1xhQ40)

ただし、この“ソング・サング・ブルー”は、ロック調なので全然ちがった印象を受けるが、アマデウスがロックになるとは、誰も想像できまい。そこが愉快である。

原曲では、筆舌を超越した麗<sup>うるわ</sup>しさに包まれる。秘め

映画「短くも美しく燃え」1カット



<http://before-and-afterimages.jp/news/C1884801429/E20090126202123/index.html>

られた愁傷が微かに薫るから、経験を積んだ大人しか理解できない。つまり、幸せの絶頂には必ず下り坂がある、ということ。だから、アマデウスは止まれずに、死ぬまで「疾走」したのだ。

関係書物をあらためて読むと、ピアノ協奏曲で、どうしても避けられないものが一つある。ハ短調の24番：K491である。これに対向するように、ベートーヴェンも第3番ハ短調Op.37を書いたそうだが、曲の雰囲気は良く似ている。K491第1楽章では、急流のようなトリルというか「トレモロの洪水」に陶醉してしまう。Op.37の第1楽章は、前奏が長く、ピアノが登場すると、なんとというか非常に軽快で気分が高揚する。オーケストレーションも、当然のように似たようなソノリティ豊かな響きである。

### ピアノ協奏曲 第24番 ハ短調 K491 1786年 (30歳)

- I. アレグロ ハ短調 3/4 ソナタ形式
- II. ラルゲット 変ホ長調 2/2 ロンド形式
- III. アレグレット ハ短調 4/4 変奏形式

<https://www.youtube.com/watch?v=jveN2zX6b6U>

<クララ・ハスキル:イーゴリ・マルケヴィッチ指揮ラムルー管弦楽団>

このK491には、この巡礼で、いましがた初めて聴いて、新たなアマデウスの浪漫に遭遇してしまった。それまでの感覚が一掃されて、新たな感覚での鑑賞が可能となる。ほっとけば禁断症状に苛まれ、どうにもやめられない。

その第1楽章の凄みは、終結部でトレモロが「疾走」して目の前で煙のごとく消えていく場面であるが、哀しみに追いつけなくて、聴いている私の感傷もおきざりにされる。ハスキルの演奏がそれに拍車をかけるのだから。そんなアマデウスの冷たい仕打ちが恨めしくなるけれども。これもあの「疾走」なのだからと諦めざるをえない。

第2楽章のラルゲット（ラルゴよりもややはやく）は、アマデウス調の「いたわり」が香ってくる。第3楽章は、つややかに激しく進む。しかも、何とも言えない哀感がつきまとうのだが、リズムの軽快さに隠されてしまう。総じて、このK491は、アマデウスのピアノ協奏曲の最高傑作ではないだろうか、と思うようになってきた。

## クラシック巡礼:モーツァルト その5 2011年11月27日、2014年12月29日、2018年9月16日改 別当 勉

なあーんだ、聴いているじゃないか、と指摘されそうだが、僕はもともと控え目なのである。小中学時代、他に先んじて手を上げて先生の質問に応えるのは、他の子供らからは「依怙<sup>えこひ</sup>鼻<sup>ひき</sup>頂<sup>き</sup>の呼込み」とよく言われた、いや、妬<sup>ねた</sup>まれたが、実際は持っているものを全部吐き出しているわけじゃない。当時からほんの一部だった。大学からは、場面で使い分ける大人のズルさが備わったけれども。中学生になってから、クラス替えした後の同級生に「君だけはいつも手を上げるので、先生がカリカリしないから助かるよ。前のクラスは大変だった。」と慰められた。また、わが村<sup>よ</sup>余瀬<sup>ぜ</sup>の先輩が、妬<sup>ねた</sup>み言<sup>ご</sup>に対して「せっかく余瀬から出た、頭<sup>なづ</sup>いい奴の足をひっぱんなよ！」と叩いてくれたこともあった。いとおしく懐かしい。

これらが妙に心に沁みている。しかし、高校、大学、社会人と進んで同じように「他に先んじること」は、数倍×数倍×数倍の競争になるから、いつまで続けられるか不安でもあった。それに比べたら、こどもの妬<sup>ねた</sup>み、嫉<sup>そね</sup>みなんてくだらない些<sup>さ</sup>細<sup>さい</sup>なことと認識していたことは確かである。(が、大人の嫉妬が桁違いであることは心の傷に深く残っている。)

それはそれで、次に書きたいのは、交響曲40番である。特に、その第3楽章メヌエットがズバ抜けている。一般には、第1楽章の甘くせかすような悲哀<sup>ひ</sup>に惹かれて聴いている人々が多い。それでいいのだが、一番有名な39番：K 543のメヌエットに勝るとも劣らないのである。40番と聴き比べてモーツァルトらしさを掴<sup>つか</sup>むべきと言いたい。そうなんだ、モーツァルトの特徴はメヌエットにある。だから、そこをよく聴くべし。メヌエットの絶品は、ディベルティメント(喜遊曲)17番であることは間違いないから、併せて聴いてみれば視野<sup>しよ</sup>とか聴野<sup>ちよ</sup>が拓<sup>ひら</sup>がるはずだ。

### <アマデウス・メヌエット>

これを語れなければ、クラシック・フリークとして即座に失格となる。それほど、アマデウス音楽の真髓の一つなのである。若い頃に、メヌエットにぞっこん惚れたことは、私としても、誇れるものとして、こうして「巡礼」を書けることになった。

ディベルティメントとは、喜遊曲あるいは食卓BGMという意味合いがある。王侯・貴族の宮廷では、贅沢にも、迎賓をもてなす豪華なダイニングのときに室内楽団<sup>はべ</sup>を侍らせて演奏させたのである。1700年代の中世末期とはそういうものであった。

その18世紀末、1789年にフランス革命が起きて、1793年にブルボン王朝最後のルイ16世も王妃マリー・アントワネットも断頭台の露と消えた。血なまぐさい革命であったが、欧州の王侯たちは震えあがった。王妃は、なんと、アマデウスの厄病女神であった女帝マリー・テレジアの娘であり、彼女は1780年に逝去したから、この残忍極まりない処刑を知らない。女帝もアマデウスもこの世にいなかった。

つまり、富を搾取・独占して我が物顔にできる時代が終焉<sup>しゅうえん</sup>したのだ（今の時代錯誤のNK王朝は除くが）。ディヴェルティメント自体はアマデウス以降、新たな作品は創られることなく、ほとんど消えてしまった。

そんな贅沢きわまりないものを20曲ほど、アマデウスは注文により作曲した。私は、アメリカ出張中に相手側のディナーに招待されたときに、会場で弦楽四重奏団が演奏して歓迎の空気が醸<sup>かも</sup>されていたことを思い出す。いまでも、そういった慣習が生きているのである。我が国でも、稀<sup>まれ</sup>にはあるかもしれないが、たいがい、CDなどの再生BGMで済まされている。

一方、私たちはアマデウスの名曲がCD等で手元にくるので、王侯らがいなくなって200年経っても、家庭においては、宮廷の贅沢な気分が味わえる。アマデウスに感謝しても、し過ぎることはない。

### ディヴェルティメント第17番 二長調「ロビニツヒ」K334 (24歳)

I. Allegro 二長調 4/4 ソナタ形式

II. Andante 二短調 2/4 主題と6変奏

### III. Menuetto 二長調 3/4 複合3部形式(トリオはト長調)

<https://www.youtube.com/watch?v=DUCtTVi4SYI>

IV. Adagio イ長調 2/2 ソナタ形式

V. Menuetto 二長調 3/4 ロンド形式(第1トリオは二短調、第2トリオはロ短調)

VI. Allegro 二長調 6/8 ロンド形式

ザルツブルクの富豪ロビニツヒの夫人ヴィクトリアの依頼で、息子ジークムントがザルツブルクの大学を1780年7月に修了するに当たってのフィナーレ・ムジーク（祝卒業音楽）をアマデウスが作曲したという。創られた時期は、モーツァルトが失意の帰郷をした1779年から自立への道を歩み始める1780年の間とされている。

注文主の目的どおり曲調は華やかである。母を亡くして傷心にくれても、アマデウスの楽天的な天真爛漫は、こういう曲にこそ顕著に現われてくる。子息や孫たちへの卒業祝いなどで流すと最高かもしれない。そういった応用が出来れば、アマデウス・カレッジを、あなたも卒業できる。

「第39番、第40番、第41番」の最後の三大交響曲は、書いた背景を語っている記録はない。アマデウスが、なにかの機会に使おうとして、先行作曲したものであろうか、という話がある。交響曲がさかんなロンドンへの旅行を考えていたのかもしれない。しかも、三大交響曲は1778年夏、1ヵ月半ほどの期間に書き上げられた。驚異的なスピードである。626馬力のAIエンジンが、存分に唸<sup>うな</sup>って吠えたのであろう。

天才の考えは、常人には読めない。まして、紆余曲折が常套のアマデウスであるから。予約演奏会の見込みが無くなったからだろう、という見方もあるが証拠がない。

歴史的には、奇跡的な巨大な名曲遺産である。こんなダイヤモンド以上の名品を、何故か、アマデウスは演奏会に使わなかった。惜しいとも言わない。まるでバッハみたいだ。

### 交響曲第39番 変ホ長調 K543 (1788年:32歳)

第1楽章 アダージョ 変ホ長調 2/2-アレグロ3/4。序奏つきソナタ形式。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 変ロ長調 2/4。

第3楽章 メヌエット(アレグレット) 変ホ長調 3/4。メヌエット傑作の一つ。

<https://www.youtube.com/watch?v=bCxizL-3oE>

第4楽章 アレグロ 変ホ長調 2/4。ソナタ形式。

槍のように伸び切った弦のユニゾンで始まり、それを伴奏として豪放なメヌエットが現れる。これほど聴きやすいメヌエットはめずらしい。こころも弾む。中間部のしずかな調子にも、耳が自然に感度を上げて聴き入ってしまう。

### 交響曲第40番 ト短調 K550 (1788年:32歳)

第1楽章 モルト・アレグロ ト短調 2/2。ソナタ形式。

第2楽章 アンダンテ 変ホ長調 6/8。ソナタ形式。

第3楽章 メヌエット(アレグレット) ト短調 3/4。

<https://www.youtube.com/watch?v=i-DpJb0TDk4>

第4楽章 アレグロ・アッサイ ト短調 2/2。ソナタ形式。

余りにも有名な第1楽章、これだけ聴いて陶醉しているクラシック・ファンも多い。あとは、野となれ山となれ。私もそうだったが、学生時代、1週間分の食費を犠牲にしてLPを買ったから全部聴こうとして欲張った。それが、犬も歩けば棒に当る、のごとく豪快なメヌエットに邂逅してしまった。もう忘れられない。喩えれば、哀しそうな巨人のメヌエットである。

私の好みは短調だから、第40番のト短調には確かに魅かれたが、豪快さも見逃さない。ゆえに、ベートーヴェンが一番だったけれども、この第3楽章でアマデウスを見直した。

## <宮廷作曲家>

三大交響曲が書かれた年、1788年には正式にハプスブルグ帝国の『宮廷作曲家』に任命された。グルックという宮廷音楽家が亡くなって、その後釜ではあるが。音楽愛好家のヨーゼフ二世は、母とは正反対に、アマデウスを愛した。年俸800フローリン(約600万円)だったが、前年に亡くなったレオポルドの血涙の宿願が叶い、アマデウスも20年の臥薪嘗胆を晴らしたのである。この『宮廷作曲家』という位は、アマデウスだけが拝命した。数人いる他の宮廷音楽家と、かけ離れて格式が最上である。内心、小躍りし、天国のレオポルドと母に慶び勇んで、ふざけずに神妙に報告したはずである。姉ナンネルにも手紙で知らせた。

こういった背景が、クラシック音楽の金字塔ともいべきこれら三大シンフォニーの創作に影響したことは、間違いない。

## クラシック巡礼:モーツァルト その6 2011年11月27日、2014年12月29日、2018年9月16日改 別当 勉

少し時を古くして、高校3年の時、<sup>やさおとこ</sup>優男の音楽の先生が、卒業式にステレオを式典の体育館舞台に飾り、式が始まる前にアイネ・クライネ・ナハトムジーク：K 5 2 5 の第2楽章ロマンスをかけてくれ、ものすごくおごそかな感じがして、ほっとけばムズムズと暴れやい18歳どもをきれいに大人しくしてしまった。モーツァルトの最大の特徴『<sup>みやび</sup>雅』が見事に演出された場面であったことを思い出しながら、あまり好きでなかった音楽の先生に心の中で脱帽した。

大学時代は映画もよくみた。その中でフランス映画「幸福」というのがあり、雑誌「映画の友」を立ち読みしたら、官能的なシーンがたくさんあるということでワクワクして観に行った。ところが、意外に映倫カットが多くて期待外れ。さらに、背景の「クラリネット五重奏曲：K 5 8 1」がしつこくてやるせない感じだった。後で、レコ芸誌でブラームスの同名曲の評論を読んだら、何とブラームスとモーツァルトとは双璧のクラリネット・クインテットであったのだ。あらためて<sup>えり</sup>襟を正した。ブラームスのは、いぶし銀で<sup>す</sup>拗ねたような曲調で、晩年の諦めかけている現世への名残りが次第にモノクロになってくる語り調が妙に沁みてくるのであるが、若い時には全然理解できなかった。モーツァルトは華やかに優美に、でも日常的な気だるさを伴って対象的である。

聴くにしても果てしがたい。モーツァルトは600曲以上もあるし、若年時代のインフレーションで作りまくったものは、駆出しの音楽科学生には無数無限のエチュード＝練習曲みたいで、全作品を作曲順に分類したケツフェル自身も全部は聴いてないのじゃないか。だから、凡人が踏破するなんて無理だ。とはいえ、はんばに批評することは許されない。一応、僕のCDライブラリは900枚を超えたことを付記しておく。

### <アマデウス雅楽>

雅楽とは、宮内庁のホーム・ページでは次のように解説されている。

日本には上代から神楽歌・大和歌・久米歌などがあり、これに伴う簡素な舞もありましたが、5世紀頃から古代アジア大陸諸国の音楽と舞が仏教文化の渡来と前後して中国や朝鮮半島から日本に伝わってきました。雅楽は、これらが融合してできた芸術で、ほぼ10世紀に完成し、皇室の保護の下に伝承されて来たものです。雅楽は、宮中の儀式、饗宴、春・秋の園遊会などの行事の際に演奏されています。雅楽には、日本固有の古楽に基づく神楽・<sup>やまと</sup>倭舞・<sup>あずまあそび</sup>東遊・<sup>くめ</sup>久米舞・<sup>ごせちのまい</sup>五節舞などの国風の歌舞のほか、外来音楽を基として作られた大陸系の楽舞すなわち中国系の唐楽と朝鮮系の高麗楽、そして、これらの合奏曲の影響で平安時代に作られた<sup>さいばら</sup>催馬楽と朗詠の歌物とがあります。

<<http://www.kunaicho.go.jp/culture/gagaku/gagaku.html>>

つまり、和洋を問わず宮廷における音楽のことなのである。いずれも、現代の私たちの音楽のように「喜怒哀楽」を単刀直入に表現しない。みやびに隠してしまう。私は、むかし、内田吐夢監督の傑作「宮本武蔵」（1963年）において、“お通さん”が吹く横笛の音曲に魅かれた

ことがある。曲名は知らない。内田吐夢監督の冴えた選曲である。妙にさみしいのだが、不思議に、それが男を呼び寄せる女の哀しいフェロモン風のように聴こえる。雅楽とは、そういうものという認識が芽生えた。半分は間違いだろうが、箏曲「春の海」：宮城道雄作曲、などを聴いて経験を積むうちになんとなく全体イメージがつかめた気がしている。

そういった曲調をアマデウスは、ヨーロッパの宮廷をくまなく旅するうちに、そこで奏される「雅」<sup>みやび</sup>を学習してしまった。彼、すなわちAIエンジンは、非常に微妙なフィーリング（情感）さえも、すぐさま自分の作品にそれが反映される。コンピュータでは永遠に不可能なアナログの世界なのだが。

学習とは学び習うということである。人は学んで頭に入れても、演技、歌、口調、作文などで即座には表現できない。意識的に練習しないといけない。現代の囲碁・将棋AIで使う「学習」とは、学んだことが瞬時に「次の一手」に現れることをさしている。ただし、デジタル的に応答は最高確率での一辺倒である。むやみな「勝負手」は指せない。追い込まれて人間なら焦るような局面でもあせならない、人間のように指し手の手指は震えない。そこを、私たちは認識しないといけない。

アマデウスは、デジタルでなく、それも含めた広義の無意識アナログのAIエンジンだったのだ。父レオポルドの渾身<sup>こんしん</sup>の傑作でもある。

さて、長々とした前書きはさておいて、アイネ・クライネ・ナハトムジークとは、ドイツ語読みであり、直訳すれば「小夜曲」<sup>しょうやきょく</sup>ということである。実際は、アマデウス目録では13番目のセレナードになる。めったに表題をつけないアマデウスのメモがこの曲の題名となった。

これを聴いた憶えがない人はいない。構成は次のとおり。

### **アイネ・クライネ・ナハトムジーク ト長調 K.525**

セレナード 第13番 (Eine kleine Nachtmusik) 作曲;1787年(31歳)

I. アレグロ ト長調 4/4 ソナタ形式

### **II. ロマンズ:アンダンテ ハ長調 2/2 三部形式**

<https://www.youtube.com/watch?v=xUjM6EX3f4Ag>

III. メヌエット:アレグレット ト長調 3/4

IV. ロンド:アレグロ ト長調 4/4 変則的なソナタ形式

私のつたない解説よりも、モーツァルト専門家として国際的に名高いハワード・チャンドラー・ロビンズ・ランドンの名言を掲げる方が早い。

この天上の音楽を書いて貰ったのは誰だったのだろうか……。モーツァルトの偉大な音楽といえば、『ドン・ジョヴァンニ』やハ短調のピアノ協奏曲、ト短調のシンフォニーなどのことばかり思い出す人は多いが、それは、モーツァルトの多重的な、あるいは万華鏡的な性格のうちの、明るい一面を身損じているものである。『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』の持つ優しく温かい完成美は、その見事なほどに洗練された外観のもとに、ト長調の明るさとハ長調の高揚とを併せ持つが、同時にモーツァルトの常

として、悲しみが表面のすぐそばに漂っている。[ランドン]

<<http://www.marimo.or.jp/~chezy/mozart/op5/k525.html>>

これ以上は言葉が出ない。せいぜい「雅」<sup>みやび</sup>程度である。

書いたときは、歌劇「ドン・ジョヴァンニ」作曲で忙しい時期であり、その間にこれほどの芸術品を書いてしまい、平気な顔しているのがAIエンジン：アマデウスなのである。確かに、誰のために書いたのか不明である。

次は、私にとってやっかいなクラリネット五重奏曲である。

### **クラリネット五重奏曲 イ長調 K.581** 1789年(33歳)

- I. アレグロ イ長調 4/4 ソナタ形式
- II. ラルゲット ニ長調 3/4 三部形式
- III. メヌエット イ長調 3/4 2つのトリオを持つ
- IV. アレグレット、変奏付き イ長調 2/2 主題と6つの変奏曲

<https://www.youtube.com/watch?v=Pn6CsDVZGC0>

<クラリネット：レオポルト・ウラッハ 歴史的な名演>

盟友アントン・シュタドラーのバセット・クラリネットを想定して書かれたという。彼はモーツァルトより3歳年長で、弟ヨハンとともにウィーン宮廷楽団で活躍していた。

(バセット・クラリネットの音域は広く、最低音が通常のソプラノ・クラリネットよりも長3度低かったうえに、音色は甘く個性的なものである。)

この曲の感じは、あくまでもやるせない。ところが、それに何とも言えない平穏なハミングがつきまとう。不思議な日常茶飯事のニュアンスである。だから、穏やかな小春日和の午後にも聴くとぴったりする。決して、感激をもとめてはいけない。アマデウスが赤ん坊のように、へらへらと笑い転げている。ほっとけばいい。

ただし、生活が自信に満たされていないと聴く気さえ起きない。おのれの人生に落ち込んでしょげている人は避けてしまう、ことも述べておく。

この年に書かれたアマデウスの最も有名な肖像画は右のとおり。クラヴィアを弾く姿を描いたという。

1789年(33歳)春頃に書き始められたが、未完で終わった。作者のヨーゼフ・ランゲはモーツァルトの妻コンスタンツェの姉アロイジアの夫、モーツァルトの義兄にあたる宮廷劇場付き俳優で、アマチュアながら絵画もよくした。

<<http://www.mozart.or.jp/data/portrait/>>

モーツァルト:33歳の有名な肖像画



また、小林秀雄「モーツァルト」から、この肖像画を描いている時期に、義兄ランゲがアマデウスを観察して書いたものを掲げよう。身近な人からの観測と感慨である。

「この偉人の奇癖については、既に多くのことが書かれているが、私はここで次の一事を思い出すだけで充分だとしておこう。彼はどう見ても大人物とは見えなかったが、特に大事な仕事に没頭している時の言行はひどいものであった。あれやこれや前後もなく喋り散らすのみならず、この人の口から呆れるようなあらゆる種類の冗談を言う。思い切ってふざけた無作法な態度をする。自分のことはおろか、凡そ何にも考えてはいないという風に見えた。或は理由はわからぬが、そういう軽薄な外見の裏に、わざと内心の苦痛を隠しているのかもしれない。或は又、その音楽の高貴な思想と日常生活の俗悪さを乱暴に対照させて悦に入り、内心、一種のアイロニー(皮肉:筆者註)を楽しんでいたのかも知れぬ。私としては、こういう卓絶した芸術家が、自分の芸術を崇めるあまり、自分という人間の方は取るに足らぬと見限って、果てはまるで馬鹿者のようにしてしまう、そういう事もあり得ぬ事ではあるまいと考えた。」

ペエトヴェンも、仕事に熱中している時には、一種の狂気状態に落入っていた。モーツァルトの白痴状態とは、趣が変わっていて、怒鳴ったり喚いたりの人騒がせだったそうである。

## クラシック巡礼:モーツァルト その7

さて、語るのが恐ろしいレクイエムである。モーツァルトが作曲中に病死して未完成となった曲だ。僕は大学6年のとき、アパートの住人である先輩学生のIW氏に薦められてカラヤン盤を買い込んで、見事に溺れた。IW氏は哲学科の貧乏学生であったが、哲学への造詣は半端じゃなく、その手ほどきみたいな講釈を何度も受けたが、理工科の僕には実体を感じられないから、ほとんど馬耳東風であった。でも、彼が推薦した『レクイエム』だけは本物だったのだ。

多感な時代に涙にくれることが、あれほど衝撃的だったことが悔やまれる。靈感が凄いのだから、何が起きるか胸騒ぎがした。結果、兄が急死したのである。

数年して、TVドラマの「白い巨塔」(山崎豊子原作)の主人公財前が進行性癌で夭折し、その葬送の場面で、なんとこのレクイエムの『ラクリモーザ(涙の日)』がかかった。限りない美しさと測り知れないほど悲痛なくだりで、モーツァルトが息絶える直前まで楽譜をスケッチしていた未完の部分であり、ラクリモーザ自体がレクイエムを代表するものである。そして、同じように何故か背筋が凍った。数ヵ月後に、財前を演じた田宮二郎が自殺したので、啞然。もう、聴くのは止めた。

しばらく経った35歳の時、会社では同僚のクラシック愛好家が、女の子らをつかまえてはこのレクイエムの法螺をふき、CDを貸し与えてあたかも我が誉とはしゃいでいた。そしたら、その愚か者が勝ち誇ったように、私に「聴いてみる?」と誘う始末。即座に「この曲を弄んではいけない。君の周りの誰かに不幸が来るよ。」とかえした。そんなばかな、と彼は一笑。しばらくして、彼の親父さんが亡くなった。そして、彼の眼は僕を直視できなくなったのだ。仕事もいい加減で浅はかな男であったことは言わずもがな。

この曲には何か憑いているという伝説は、誰しも否定できないにちがいない。僕は、靈魂の存在は信じていないが、この曲は鎮魂でなく、諦めきれないほど、生への憧憬が秘められている感じがする。

レクイエムとは、死者のためのミサ曲あるいは鎮魂ミサ曲と訳されてきた。

蓋し、美しい。極美の感動である。フォーレのサファイアの如く蒼く澄み切ったレクイエムとは違って、人間らしく情感が濃密にこもっているのだ。どうしても聴きたいときには、僕はひたすら全身全霊を捧げて正座する。決して、涙ぐんでナルシズムに耽らず、また、他人にその美曲を知ったかぶりで自分の作品のように吹聴したり、CDを貸したりして弄ばない。このモーツァルトだけは、曜変天目のように絹布で包み桐の箱に入れて持ち運ぶように扱うべきである。授かる人も素養がなければ、きちんと受け取れない。

なんと、余り興味が湧かなかったモーツァルトに、巡礼として思い出したらこんなになってしまっていた。

## 曜変天目



<http://www.seikado.or.jp/collection/clay/001.html>

## [註]

曜変天目は天目茶碗の一種である。曜変というのは、茶碗内側の漆黒の釉(うわぐすり)面に結晶による大小さまざまな斑紋が群をなして一面に現れ、その周りが瑠璃色の美しい光彩を放っているものを言う。しかも陽光の当て方によって斑紋と色が変わるから、曜変と呼ばれる。このような天目は曜変が出るように様々に工夫して焼いても不可能であり、偶然に極めて稀にしか焼けない奇跡の茶碗である。科学技術が及ばないのだ。しかも、陶器であるから脆いので保存には神経を使う。

なお、左掲の静嘉堂文庫美術館所蔵の曜変天目(茶碗)は、もと徳川將軍家所蔵であったものが、三代將軍・家光の時代、春日局を経て、後に淀藩主となる稲葉家へ伝えられたとされる。

今日、世界中で現存する曜変天目(完形品)は、日本にある三碗のみ、京都・大徳寺龍光院、大阪・藤田美術館所蔵の各一碗と本碗で、すべてが国宝に指定されている。

## <アマデウス・アセンション>

一世を風靡したモダン・ジャズの巨人ジョン・コルトレーンの名盤“アセンション(Ascension)”を引いてしまったが、直訳すれば「上昇」という意味である。ひいては天に昇るということであり、アマデウスはレクイエムを書きながら昇天したのだ。しかも、その速度は緩まることなく、その楽譜をスケッチ途中で逝ってしまった。あたかも、疾走する雲に乗った仙人のように。とにかく、息絶えるときまで楽譜を書いて突っ走っていたのだ。こんな死に様を、AIエンジンの面目躍如と言ってもよいであろうか。誰も真似できないほどクールである。

(現代米語では、かっこうよいさま、いかしたさまを“クール”という。)

未完成の傑作は少なくない。例えば、バッハの「フーガの技法」とか、シューベルトの未成交響曲、マーラーの交響曲第10番、ブルックナーの交響曲第9番など、未完成でも屈指の名作たちが軒を並べている。半端でも、マエストロの作品は、マエストロだから何故半端なのか、惹きも切らない疑問が呈されて、かえって幽玄さを醸してきた。したがって、当然のように完成を目指した研究者の探求が絶えない。

アマデウスのレクイエムは、彼の死後、弟子のジュスマイヤーによって手が加えられ、一応、完成された。これは、依頼主から既に作曲料(100ドゥカーテン=450グルデン)の半額を前金で受け取っていたので、残りを受領するために未亡人コンスタンツェにより、ジュスマイヤーがせかされたからと聞く。この依頼主の使者は、悪魔のイメージであたかも地獄からの使者のように、黒いマントと黒い頭巾をかぶったデビルのイメージが先行して語られてきた。けれども、その使者は、注文主である貴族フランツ・フォン・ヴァルゼック・シュトゥパハ伯

爵の執事だったらしい。

From <<https://ameblo.jp/piano-no-kiseki/entry-12135952939.html>>

ウィーン時代のモーツァルトの個人レッスン月謝代は、一人当たり、6ドゥカーテン(約8万円)だった。

#### モーツァルト作曲料

|                   |                      |              |
|-------------------|----------------------|--------------|
| フィガロの結婚 30歳       | 450フローリン(以下日本円だけで記載) | 約140万円       |
| ドン・ジョヴァンニ(ブラハ初演)  |                      | 約140万円       |
| ドン・ジョヴァンニ(ウィーン初演) |                      | 約70万円        |
| コシ・ファン・トゥッテ       |                      | 約280万円       |
| 皇帝ティートの慈悲 35歳     |                      | 約280万円       |
| <b>レクイエム(前金)</b>  | <b>35歳</b>           | <b>約70万円</b> |

このヴァルゼック伯爵は、1791年2月に夫人を失ったので、死者のためのミサ曲、レクイエムを自作と称して奉獻することを思い立ち、その代作者としてモーツァルトに白羽の矢を立てたのであった。依頼主は、秘密裡に進めたく誰とも分からないように黒づくめにした。(それが魔界からの使者のような伝説になったが。)アマデウスは、ゴーストライターであったのだ。

注文を受けるや、ただちに着手されたが、9月28日初演予定の「魔笛」の最後の仕上げや、「皇帝ティトゥスの慈悲」の作曲のための中断をはさみながら、死の前日の1791年12月4日まで続けられた。この時点で完全にできあがっていたのはイントロイトゥスとキリエの全部、セクエンツィアとオッフエルトリウムの声と低音のパートであった。

セクエンツィアの「**ラクリモーザ(涙の日)**」のみは8小節目で中断されていた。

未亡人コンスタンツェは、最初、ウィーンの作曲家で高名なアルブレヒツベルガーの弟子でもあったアイブラーに全曲の補筆完成を依頼したが、自分には荷が重すぎると判断したためであろうか、この任務をアイブラーは放棄してしまう。

結果、弟子ジュスマイヤーに要請して、彼の補筆により出来上がったレクイエムは、それでもジュスマイヤー<sup>けんこんいってき</sup>乾坤一擲の技が発揮された。死の直前にアマデウスからいろいろ<sup>きしず</sup>と指図があったらしく、なんとか仕上がった。現在、私たちが主に聴いているのは、そのジュスマイヤー版である。彼の他の作品は埋もれてしまっているから、まさに、彼はこの補筆だけで天才アマデウスの脇役として、歴史に<sup>すいめいちくはく</sup>垂名竹帛の榮譽を得たのだ。

(**垂名竹帛**とは、歴史に名前が残るような功績や手柄のこと。「竹帛」は竹の札と綿布のことで、紙のない時代には竹帛に文字を書いていたことから、歴史書や書物を指す。垂名とは、竹簡や木簡に名を垂れることであり、いわば名を残したことである。)

凡そ200年後の1971年に、ミュンヘンのパイヤーはモーツァルトの自筆譜を詳細に検討し、作曲家最晩年の様式と音響像を顧慮しつつ、オーケストレーションを大幅に改訂した新版を刊行した。これも、ドイツではパイヤー版として使われているようである。

彼のレクイエムの構成は、次のとおり。

From <<http://www.oekfan.com/note/mozart/requiem.htm>>

- 第1曲 入祭唱（イントロイトゥス） 二短調
- 第2曲 あわれみの賛歌（キリエ） 二短調
- 第3曲 続唱（セクエンツィア）
  - (1) 怒りの日（ディエス・イレ）
  - (2) 不思議なラッパ（トゥーバ・ミルム）
  - (3) みいつの大王（レックス・トレメンデ）
  - (4) 憶えたまえ（レコルダール）
  - (5) 呪われた者（コンフターティス）
  - (6) 涙の日（ラクリモーザ）**
- 第4曲 奉納唱（オッフエトリウム）
- 第5曲 感謝の賛歌（サンクトゥス）
- 第6曲 祝せられさえたまえ（ベネディクトゥス）
- 第7曲 神の小羊（アニュス・デイ）
- 第8曲 コンムニオ

#### 【解説】

第1曲 入祭唱（イントロイトゥス） 二短調 アダージョ 4／4

モーツァルトが全曲書いたものです。バセットホルンとファゴットが演奏する暗く沈んだ雰囲気  
の序奏に続き、合唱のバスから「レクイエム」と歌い始めます。この主題は、半音下がる音  
型で以降の楽章にも登場します。音楽が優しい感じになると、ソプラノ独唱が祈りの歌を歌い  
始めますが、曲全体の雰囲気は悲痛です。

第2曲 あわれみの賛歌（キリエ） 二短調 アレグロ 4／4

前の曲から続けて演奏されます。この曲は、合唱声部とバスのみモーツァルトが完全に書いて  
おり、フライシュテッターが補筆しています。独唱は入りません。バスがいきなり「キーリ  
ーエー（哀れみ給え）」と歌い始めます。これに「クリステ・エレイゾン（キリストよ哀れみ  
たまえ）」とがからみあって二重フーガになります。クライマックスに達したところで一息つ  
いて、アダージョに落ち着きます。

第3曲 続唱（セクエンツィア）

6部からなっています。歌唱声部とバス、管弦楽声部の主要音型をモーツァルトが作曲し、ア  
イブラーがオーケストレーションを担当しています。ただし、ラクリモサの9小節以降は放棄  
したため、ジュスマイヤーが作曲しています。

(1) 怒りの日（ディエス・イレ） 二短調 アレグロ・アッサイ 4／4

合唱のみで歌われます。非常に劇的な曲です。モーツァルトの曲中もっともドラマティックかもしれません。トランペットの合いの手は、ジュスマイヤー作曲のものですが、とても印象的です。

(2) 不思議なラッパ (トゥーバ・ミルム) 変口長調 アンダンテ 2/2

声楽は、バス独唱のみ入ります。トロンボーン・ソロの後、バスが引き継ぎます。これまで短調の曲が続いたので、ほっとした雰囲気になります。このメロディをテノール、アルト、ソプラノの順に歌い継いでいきます。最後は、やさしい雰囲気での四重唱で結ばれます。

(3) みいつの大王 (レックス・トレメンデ) ト短調 グラーヴェ 4/4

合唱が「レックス (大王)」と力強く叫んだあと、弦楽器が下降していくようなパターンが3回繰り返されて始まります。その後、カノン風に展開し、「私を救い給え」と弱々しく歌われ曲を閉じます。

(4) 憶えたまえ (レコルダーレ) ヘ長調 アンダンテ 3/4

独唱者のみで歌われます。バセットホルンとチェロが始終歌に寄り添い、穏やかに歌われます。

(5) 呪われた者 (コンフターティス) イ短調 アンダンテ 4/4

トロンボーンと低弦の上に乗った力強い男声合唱 (地獄からの声) と柔らかい女声合唱 (天国からの声) とが交互に表れながら進みます。最後は、安らぎに満ちた四部合唱に落ち着きます。

**(6) 涙の日(ラクリモーサ) ニ短調 8/12**

この曲の途中まで書いてモーツァルトは亡くなっています。そう思って聞くと、この美しい旋律が一層心に迫ってきます。引きずるような伴奏の方は、同じ音型が延々と続きます。控えめなクレッシェンドが人間的な感情の盛り上がりを感じさせます。最後は「アーメン」で結ばれます (実は、「アーメン」の部分は、セクエンツァ全体を締める壮大なフーガになるはずだったようです)。

第4曲 奉納唱 (オッフエトリウム)

ジュスマイヤーがオーケストレーションをしたものです。

(1) 主イエスよ (ドミネ・イエス) ト短調 アンダンテ・コン・モート 4/4

合唱及び独唱で歌われます。合唱のテノール、アルト、ソプラノ、バスの順にフーガが行われた後、今度は、独唱でソプラノ、アルト、テノール、バスの順にカノンが歌われます。再度、合唱によるフーガの大らかな響きとなって終わります。

(2) 称賛のいけにえ (ホスティアス) 変ホ長調 アンダンテ 3/4

合唱だけで歌われます。前の曲が対位的な処理が目立ったのに対して、こちらはハーモニーの美しさが際立っています。はじめは明るい雰囲気ですが、次第に調性が不安定になり、後半ではト短調になります。この部分は、前曲と同じです。

第5曲 感謝の賛歌（サンクトゥス） 二長調 アダージョ 4/4

ジュスマイヤーが作曲したものです。力強く「サンクトゥス」と歌い始めます。これを3回繰り返します。後半の「ホザンナ」の部分では、アレグロ3/4に変わり、バス、テノール、アルト、ソプラノの順に合唱によるフーガが展開します。

第6曲 祝せられさえたまえ（ベネディクトゥス） 変口長調 アンダンテ 4/4

ジュスマイヤーが作曲したものです。ヴァイオリンとバセットホルンでやさしい雰囲気、アルト独唱が伸びやかに歌い始めます。それに、ソプラノ、バス、テノールの順に独唱が加わり、四重唱を形づくりします。金管による和音が3回繰り返された後、調性が変わり、最後はアレグロのフーガになります。これは、前曲の「ホザンナ」の部分と同じです。こちらの方は、テノールから入ります。

第7曲 神の小羊（アニウス・デイ） 二短調 3/4

ジュスマイヤーが作曲したものです。不安げな二短調の音型がヴァイオリンで演奏される厳粛な雰囲気で始まります。和声的に書かれた合唱曲で、全体に敬虔な雰囲気が漂っています。

第8曲 コンムニオ 二短調 アダージョ 4/4

ジュスマイヤーが編曲したもので、第1～2曲の音楽を転用しています。これは、ジュスマイヤーが力尽きたからではなく、モーツァルトの指示によるものと考えられています。最初の楽章が再現することに、曲全体の統一感が強められています。まず、第1曲と同様ソプラノ独唱のメロディで歌い始められます。その後続くアレグロは、第2曲「キリエ」の替え歌です。バス、アルト、ソプラノ、テノールの順に続きます。最後はアダージョにテンポを落とし、重々しい雰囲気の中で全曲が締められます。(2002/3/6)

From <<http://www.oekfan.com/note/mozart/requiem.htm>>

完成されたレクイエムは、注文したヴァルゼック伯爵の指揮により、1793年12月にノイクロスター教会で演奏された。初演はウィーンで、同年1月、アマデウスの支援者でもあったヴァン・スヴィーテン男爵による遺族のためのチャリティ・コンサートにて行われた。

なお、アマデウスが天下一品のレクイエム(死者のためのミサ曲)をスラスラと、どうして作曲できたのか、という疑問は消えない。調べたところ、ミサ曲については、次のように、小さい時から10曲以上も手掛けてきたのであるから、AIエンジンの学習機能はみごとに果たされてきたのだ。蛇足になるが、イタリア旅行で暗記した“ミゼレーレ(憐れみ給え)”のスコアも貢献したにちがいない。

|          |                              |
|----------|------------------------------|
| ミサ曲 卜長調  | K49(47d)「ミサ・ブレビス」 1768年(12歳) |
| ミサ曲 二短調  | K65(61a)                     |
| ドミニクス・ミサ | K66                          |
| ミサ曲 へ長調  | K116(90a)(偽作)                |

|           |                  |            |
|-----------|------------------|------------|
| 孤児院ミサ     | K139(47a)        |            |
| 小クレド・ミサ   | K192(186f)       | 1774年(18歳) |
| 雀ミサ       | K220(196b)       |            |
| 戴冠式ミサ ハ長調 | K317             | 1779年(23歳) |
| 大ミサ曲 ハ短調  | K427(417a) (未完成) |            |

### レクイエム ニ短調 K.626

私のつたない知識の中では、レクイエムの発端はアマデウスが音楽史上、初めて聳え立ったものとして刻印されている。これに触発されて、

ベルリオーズのレクイエム (1837年初演)

ブラームスのドイツ・レクイエム (1869年初演)

ヴェルディのレクイエム (1874年初演)

フォーレのレクイエム (1888年初演)

など屈指の名作が連なる。

私は、いずれも聴いてきたが、やはり、アマデウスをスタート地点として始まり、ヴェルディのものがアマデウス原点に肉迫している。しかも、ヴェルディのは、オーケストラおよび合唱団の規模と音響の凄さに度肝を抜かれる。たいがいの録音は、ラウドネスのピークで歪んでしまっている。ダイナミック・レンジ (ノイズ・レベルから歪がない最大レベルまで) を捉え切れていない。特に、「怒りの日」の凄まじい合唱の録音は、混変調歪がひどい。数種のCDを試聴した結果、カラヤンの録音 (1984年グラモフォン) が一番である。当然、カラヤンの解釈と演奏には、毎度のように唸ってしまう。

なお、ヴェルディの“ラクリモーザ”もアマデウスにひけをとらないが、カンツォーネ的な唄には、どうしても地中海の楽観性がつきまとう。背筋が凍るほどではない。でも、ヴェルディ美の極致に包まれていることは確かだ。

### <死因>

35歳のアマデウスの死因は、毒殺説が一時期横行したが、現在までの調査の結果、それが否定された。実は急性関節リウマチだったようだ。体のあちこちに腫瘍ができていたらしい。このため、余り動くことができなかった。義妹のゾフィー (コンスタンツェの妹) の証言もあるという。

しかしながら、前年の1790年にアマデウスの理解者ヨーゼフ二世も、既に他界してしまった。彼は、母のマリア・テレジアとは施政方針が異なり、プロイセンのフリードリヒ二世にならって啓蒙専制主義を唱え、積極的に近代化政策を講じてきた。革新的な方針を踏まえた音楽愛好家でもあったから、ウィーンの古い音楽文化をも刷新しようとしたらしく、そういった

意味で、イノベーション先鋒アマデウスも手厚い保護を受けてきた。だから、最後の年にはアマデウスに、いやな暗い影がさしてきたのである。

後を継いだレオポルド二世の経費抑制の政治方針により、ウィーン市の新条例は、葬儀は数人の参列で経費も制限した。このため共同墓地に他の死体とともに葬られ、20世紀になって、死体を掘り出しての病理検査により、科学的に死因を究明しようとしたが、どれがアマデウスの遺骨なのか判定不可能だったという。

そんなこと、アマデウス本人は、F1レーサーのイルトン・セナのように超高速で飛ばして天逝したのだから、殆ど気にもとめなかったろうが、彼の魂は、やはり、むせび泣いている。“ラクリモーザ”を聴いたら、そう感じられてしょうがない。

最後に、外から見れば、これを匿名で依頼したヴァルゼック伯爵の慧眼はとび抜けているが、それどころか、アマデウスは数多の貴族たちから信頼されていたこと、期待どおりに名作が出来上がること、それほど高名だったことを如実にもの語っているのではないだろうか。どうしても、私たちは、父レオポルドのように宮廷という上への目線にとらえてしまう。アマデウスは、そうじゃない、と気付いていた。だから、宮廷のお呼びが無くても、レッスン、予約演奏会、歌劇団からの依頼などの一般需要に対して、喜び勇んで創って演奏して指揮して、多忙の日々に追い回されたが、実に、身を粉にして働いた。

そして、いつのまにか見えた、民衆レベルで有名にならなければ、人気を博さなければと。この思想は、まさに、阿吽の呼吸でベートヴェンに受け継がれていくのだ。

これを誰かが言わなければ、アマデウスの気持ちは治まるまい。

## 【オペラ】

これまでの私の「モーツァルト巡礼」では、オペラが抜けている。アマデウスを語る時には、スキップできないジャンルであるが、私の人生では、オペラに触れたいという切実に想う時が少なかった。というのは、オペラをCDで聴くと、語り調のレシタティーヴォ（叙唱）や、アリアの台詞が判らず、CDに付属のテキストを逐一、目で追わなければならないからである。ややもすると、コックリと居眠ってしまう。はっとして目を覚ますと、いまどの辺りか分らなくなる。ストーリーを見失う。かといって、張り詰めて目を凝らして2時間以上も集中すると猛烈に肩が凝って、音楽の味わいがみえなくなってしまう。これが嫌だった。

しかしながら、ハイファイVTRが流行ってきて、かろうじて、1980年代に『フィガロの結婚：K492』をNHKの放送をビデオに録って視聴できた。台詞がテロップで画面に出るから、これはいけると思った。しかし、このオペラが意外に感銘深く残っている。続いて、プッチーニの「トスカ」とヴェルディの「椿姫 = トラヴィアータ」については、フラフープみたいに今や消えてしまったレーザーディスクが出てきたので、続けざまに視聴することになった経験が懐かしい。最近では、往年の名ソプラノ歌手のマリア・カラスを標榜して、彼女が愛したベルリーニの「ノルマ」に胸が震えるほどになった。これらについては、いずれ、取り上げることになる。

反面、高価なハイファイVTRやレーザーディスク・プレーヤーに投資したことは、無駄以外のものでもなかったことが口惜しい。消費者をないがしろにしたソニーやパイオニアなどには、今でも恨んでいる。それでも、彼らは、CDからSACDや、DVDからBD（ブルーレイディスク）と飽きもせず反省もせず、技術開発を止めようもしない。電子立国を誇る日本の国是は解かるが、我々消費者の想いも勘案して欲しい。それは、“アッパー・コンパチブル”という、古い媒体でも再生・記録できる仕様を徹底することである。一応は、現代の装置では機能的にダブルに装備されて来ているけれども。

さて、愚痴はべつにして、アマデウスのオペラが本題である。

最盛期のウィーン時代に、アマデウスが作曲した有名なオペラは、次のとおり。

|             |       |    |         |             |
|-------------|-------|----|---------|-------------|
| 後宮からの誘拐     | K.416 | 独語 | 1782年初演 |             |
| フィガロの結婚     | K.492 | 伊語 | 1786年初演 | （台本はダ・ポンテ作） |
| ドン・ジョヴァンニ   | K.527 | 伊語 | 1787年初演 | （台本はダ・ポンテ作） |
| コジ・ファン・トゥッテ | K.588 | 伊語 | 1789年初演 | （台本はダ・ポンテ作） |
| 魔笛          | K.620 | 独語 | 1791年初演 |             |
| 皇帝ティトの慈悲    | K.621 | 伊語 | 1791年初演 |             |

完成オペラは17もある。晩年の10年間に6つの超人気オペラが書き上げられた。余りに

も有名な「フィガロの結婚」と「魔笛」については、聴いてない人、興味ない人さえも題名だけは、鮮明に憶えているはずだ。あたかも、信長、秀吉、家康みたいに、彼らが何をしたか知らなくても名前だけは頭から離れない。これを、デファクト（既成事実）という。人間社会の不可思議な認識の働きである。パソコンという言葉も同じで、いくら、本来の標準的なメイン・フレームのコンピュータを唱えても、いまや変えることはできない。

でも、中身を知るとさすがに眼が、耳が開かれる。「巡礼」とは、そのために巡って礼を捧げる意味合いで使ってきた。私自身から他の人々へも波及していくことを願って。

## オペラの種類

- オペラ・セリア 主に、18世紀にイタリアで作られたオペラで、セリアは英語だと‘serious’という意味で、厳粛なオペラを指す。正歌劇などとも言われる。
- オペラ・ブッフア オペラ・セリアに対して、イタリアの喜劇風オペラの種類をオペラブッフアと呼ぶ。日本語では喜歌劇などといわれ、オペラセリアより少し遅れて多くなってくるのがオペラブッフアで、庶民的なものが多く、モーツァルトの「フィガロの結婚」が代表。
- ヴェリズモ・オペラ ヴェルディのあとイタリアに出てきたもの。ヴェリズモとは、イタリア語で現実的な、と訳される。それまで貴族などが中心だったのに対し一般の人々の日常生活の愛憎、実際にあった事件を描くなどの作品が多くなった。代表的なものはマスカーニの「カヴァレリア・ルスティカーナ」で、プッチーニの「トスカ」などもこの部類。
- がくげき  
楽劇 イタリアでヴェルディのオペラが喝采を浴びていた頃、ドイツの地域ではワーグナーのオペラが上演されていた。伝統的なオペラに対し、革新的に、音楽と文学(神話等)と美術(舞台)を融合させた新しい種類の『楽劇』を彼は編み出した。代表的なものはワーグナーの「ニーベルングの指輪」である。
- オペレッタ オペレッタは日本語で喜歌劇とか軽歌劇と訳されるが、イタリアのブッフアに比べると、娯楽性がより高く、歌と音楽が軽妙でストーリーもわかりやすく、観客を楽しませる要素が多い。現在上演されるオペレッタは、ほとんどドイツ語で、最も有名なオペレッタはヨハン・シュトラウス作曲の喜歌劇「こうもり」である。
- ジングシュピール Singspielは、ドイツ語による歌芝居や大衆演劇の一形式を指す。こんにちのミュージカルに似ているが、一種のオペラやオペレッタと呼ばれることもある。

<<https://opera-diva.com/opera-type/>>

アマデウスは、イタリア旅行で骨の髄まで学んだオペラ、実際はオペラ・ブッフアというが、これに異常な興味を示した。そして、ロレンツォ・ダ・ポンテ（1749 - 1838年）という脚本家と出会い、意気投合して傑作中の傑作、三作品を書き上げた。それらが、「フィガロの結婚」、「ドン・ジョヴァンニ」及び「コシ・ファン・トゥッテ」として続けざまに現れた。これらの功績は計り知れない。しかも、演奏回数、CD・DVD発売数は、他を圧倒している。いずれ

も、民衆が跳びはねて喜悅するほどの樂興に酔い痴れたのだから。宮廷からの依頼というよりも、ハプスブルグ家に<sup>しいた</sup>虐げられたてきたプラハの宮廷とか、庶民のニーズ高騰により創作したものである。

反面、ウィーンの王侯貴族からは敬遠された。時代は、フランス革命により実権が民衆に移りつつあるから、無駄な抵抗もしたらしい。すなわち、ウィーンの貴族らの使用人たちは、貴族たちが結束して「アマデウスのオペラを観るな」という号令に従わざるを得なかったという背景もあったという。が、パラダイムシフト：潮流という皮肉な時代の流れは、貴族に引き潮として、民衆に満ち潮として作用したのだから、無駄以外なにもものでもなかった。それを感じたアマデウスのセンスの鋭さは、さすがにベートーヴェンの嗅覚に引き継がれていったのだ。

無理してベートーヴェン音痴になったゲーテは、アマデウスはこよなく愛したという。ゲーテが監督を務めたワイマール劇場では、モーツァルトのオペラが、1791年から26年間に280回も上演されと伝えられている。内訳は次のとおり。

|             |     |
|-------------|-----|
| 魔笛          | 82回 |
| ドン・ジョヴァンニ   | 68回 |
| 後宮からの誘拐     | 49回 |
| コシ・ファン・トゥッテ | 33回 |
| 皇帝ティートの慈悲   | 28回 |
| フィガロの結婚     | 20回 |

磯山雅「モーツァルト」より

さすがに、このマグマのような民衆熱にうなされたワーグナーは、楽劇創立のためにアマデウス研究にも没頭したという。彼は、とにかくウィーンを見限って、ドイツ中央部の都市で活躍した。だから、晩年に、誰も見向きもしなかった地方の町：バイロイトで旗を上げたのである。そこにバイロイト祝祭劇場を造って、聴衆を集めた。その手管は、彼の鋭い洞察により、ドイツ中世の「神話：ニーベルングの指輪」を採り上げ、ドイツ中のインテリに狙いを定めた。彼らを瞠目させれば、おしゃべりのプロでもあるから、必ずロコミで聴衆が増えるはずと、考えたのであろう。これがもの見事に的中した。

現代流にいうと、宣伝・広報社やプロダクション顔負けのマーケティング手法に気付いて実践したのだ。しかも、今でもワグネリアン・フリークが増え続け、後を絶たない。始末に終えないほど染みわたってきている。宗教が<sup>はびこ</sup>蔓延るすき間がない。

それもこれも、アマデウスのおかげである。

## <フィガロの結婚>:オペラブツファ K492 (30歳)

|        |                          |             |
|--------|--------------------------|-------------|
| 【初演】   | 1786年5月1日                | ウィーン、ブルク劇場  |
| 【原作】   | フランスの劇作家ボーマルシェの戯曲三部作の2作目 |             |
| 【台本】   | ロレンツォ・ダ・ポンテ (イタリア語)      |             |
| 【時代】   | 18世紀半ば、スペインのセヴィリャ        |             |
| 【登場人物】 | アルマヴィーヴァ伯爵 (Br) : 領主     |             |
|        | 伯爵夫人 (S) :               | 伯爵の妻        |
|        | スザンナ (S) :               | 伯爵家の女中      |
|        | フィガロ (Bs or Br) :        | 伯爵の従者       |
|        | ケルビーノ (Ms) :             | 伯爵邸に住む少年    |
|        | バルトロ (Bs) :              | 伯爵家お抱えの医者   |
|        | マルチェリーナ (Ms) :           | 伯爵家の女中がしら   |
|        | バジリオ (T) :               | 伯爵邸の音楽教師 ほか |

お話はきわめて単純であるが、笑い転げるほど滑稽なのである。

若い二人のフィガロとスザンナの結婚に、主人の伯爵が横やりを入れる。つまり、若く美しいスザンナに横恋慕するのだ。ただし、伯爵には「使用人の花嫁はまずご主人と初夜を共にする」という習わし「初夜権」があったので、伯爵はパワハラという罪の意識が少ない。これが発覚してフィガロが落とし穴を考えて実行するが失敗。ところが、そこに伯爵夫人が登場して夫の浮気に激怒（現代だから浮気というが）。しかし、証拠がないから自分がスザンナに成りすまして、夜の二人の密会に出てきて、伯爵の浮気がばれる。てんやわんやになるが、伯爵は平謝りして、全員、ハッピーエンド。というコメディである。

参考 <[http://www.geocities.jp/wakaru\\_opera/lenozzedifigaro.html](http://www.geocities.jp/wakaru_opera/lenozzedifigaro.html)>

最高のアリアは、伯爵の小姓頭ケルビーノ少年（メゾ・ソプラノ）が歌う

### 「恋とはどんなものかしら」

<https://www.youtube.com/watch?v=mYLSle-scrE>

<エリーザベト・シュヴァルツコップのソプラノ>

であることは間違いない。これほど、アマデウスの天国的な天真爛漫さが見事に発揮されているものは、余り聴けないと思う。ケルビーノが慕う伯爵夫人にいいところを見せようと、自作の詩（カンツォーネ）を精一杯歌う。恋への憧れに満ちて初々しい。なお、少年ケルビーノはメゾ・ソプラノ歌手が演じるようだが、あたかも、乙女が慕う男を想う気持ちも込められているともとれる。少年の恋心の相手、伯爵夫人は熟女であるから、かなりの皮肉になるろうか。

名脚本家ダ・ポンテの傑作台本による。アマデウスとは、これより名コンビとなる。なんと、

ウィーンの市民から「フィガロの結婚」は絶賛を浴びて年内に9回も再演されたという。

私たちには、すでにドリフターズのドタバタ寸劇に類するものと思えば、お馴染みであろう。しかしながら、そこにアマデウスの精妙な音楽とアリアが入って舞台を飾りつけると、とんでもない豪華なオペラになってしまうことに気付かねばならない。現在に、アマデウスをタイム・スリップさせて、宝塚歌劇にアマデウスを付けたらどうなるか、想像すると面白い。

当時の社会情勢からみれば、世論の評価が二分された。圧倒的多数の民衆側と権威をかさにきた貴族側とである。庶民は大いに拍手喝采したが、王侯も含めた貴族側としては、『伯爵』をコメディアンのように扱うから権威喪失となり、<sup>せつしやくわん</sup>切齒扼腕し、敬遠してしまった。いま、私たちが観ると、アマデウスの超高級な音楽に<sup>いろど</sup>彩られたエンターテインメントであるが、当時は、貴族まで笑い者にするオペラは殆どない。支配者階級の好む歌劇は、オペラ・セリアと言って、生真面目すぎるから、彼のオペラブッフアは革新的だったのである。つまり、はや支配者階級の没落が始まったのだ。

アマデウスは、その急先鋒になってしまっても相変わらず、ふざけて知らん顔。それどころか、次作に拍車がかかる。

この年の12月にプラハに行って上演したところ、絶賛を浴びてしまった。アンコールの呼び声が多すぎて、そのオペラの名アリア

### 「もう飛ぶまいぞこの蝶々」

<https://www.youtube.com/watch?v=rTdcfc7ugrg>

の主題を変奏してクラヴィア演奏を30分も続けた結果、またまた大歓声が渦巻いたと聞く。彼はこのときに、千フローリン（約700万円）の収入を得たらしい。

そして、プラハの劇場支配人ボンディーニから、ダ・ポンテとアマデウスは新たな歌劇制作の依頼を受けた。作曲料は4500グルデン（約3千万円）だった。それにより歌劇「ドン・ジョヴァンニ：K527」が産まれた。ここでも貴族が<sup>かいぎやく</sup>諧謔（ふざけ）のダシにされる。

1787年（31歳）、「ドン・ジョヴァンニ」のプラハ初演は大好評を博した。が、ウィーンでは冷たい反応が続いたのである。やはり、貴族たちはあからさまに笑い者にされることに非常に嫌った。一方、ハプスブルグ家にしいたげられてきたプラハの貴族たちは、鬱憤が晴れるとして絶賛した。この時にも、ウィーンの王侯貴族の没落が雪崩れ始めていたのだ。

## <魔笛=マジック・フルート>:ジングシュピール K620 (35歳)

- 【初演】 1791年9月30日 ウィーン、アウフ・デア・ヴィーデン劇場
- 【台本】 ヨハン・エマヌエル・シカネーダー(ドイツ語)
- 【原作】 クリストフ・マルティン・ヴィーラント
- 【時と場所】 古代、エジプト
- 【登場人物】 タミーノ(T): 王子  
パミーナ(S): 夜の女王の娘  
パパゲーノ(Br): 鳥刺し  
パパゲーナ(S): パパゲーノの恋人  
夜の女王(S): 世界征服を狙う女王  
ザラストロ(Bs): 大祭司 ほか
- 【あらすじ】 時は古代、舞台はエジプトで架空の世界。

王子タミーノは岩山で大蛇に襲われ気を失う。「夜の女王」の3人の侍女達が助ける。鳥の狩猟中に通りかかったパパゲーノが、助けてやったのは自分だと嘘を付く。パパゲーノは口に錠を掛けられる。王子タミーノは、侍女達から女王の娘パミーナの絵姿を見せられ一目惚れ。女王は、悪人ザラストロに捕らえられた娘を救い出してくれれば、娘を王子に与えると約束。王子は侍女達から「魔法の笛=マジック・フルート」を受け取り、ザラストロの神殿に行く。一方、口の錠前を外してもらえたパパゲーノも王子について行き、「魔法の鈴」を受け取る。

ザラストロの神殿で離ればなれになった王子タミーノとお供のパパゲーノが先にパミーナを見つける。その後、魔法の笛と鈴の力で導き合ったタミーノとパミーナは、ザラストロの前でお互いを運命の人だと思ふ。

実はザラストロは祭司で、世界征服を企む夜の女王の邪悪な野望の犠牲とならないようにパミーナを保護していた。ザラストロはタミーノに、パミーナを得るための試練を授ける。ついでにパパゲーノも恋人を得るために試練を受ける。まずは「沈黙」の試練。次の「火」の試練、「水」の試練は、タミーノとパミーナは「魔法の笛」の力を借りて乗り越える。パパゲーノは辛抱するのは大嫌いで、試練から脱落。それでも「魔法の鈴」の力を借りて、若い娘パパゲーナと出会い、恋人になる。

夜の女王も黙っていない。自らザラストロの神殿に侵入を試みるが、雷に打たれ闇夜に落ちる。ザラストロは試練に勝ったタミーノ、パミーナを祝福して、太陽神の子オリシスとイシスを讃えた。

参考 <[http://www.geocities.jp/wakaru\\_opera/diezauberflote.html](http://www.geocities.jp/wakaru_opera/diezauberflote.html)>

作曲は、彼の最後の1791年である。チェコのレオポルド二世の戴冠式のために、プラハからの要請で歌劇「皇帝ティートの慈悲：K621」も、9月には仕上げなければならなかった。ウィーンのシカネーダー一座との興行のため、5月から開始されている大作「魔笛」の作曲を中断せざるをえない。さらに、魔界からの使者のような依頼人に「レクイエム」も発注さ

れた。すさまじい多忙の中であって、ジングシュピール「魔笛」：ドイツ語が完成され、やっと9月末に初演できたが、続いて、疲労困憊<sup>ひろうこんぱい</sup>しながらもレクイエムを書き続けたのだ。強力なAIエンジンは消耗したが、どうにも止まらない。ついに、AIエンジン搭載のボディがボロボロになって、そのまま12月に逝<sup>い</sup>ってしまった。

それゆえに、オフザケマン＝アマデウスの「魔笛」はメルヘン的な神がかりとなった。私たちの身近に、メルヘン神の大作として残されたのである。

しかし、誰が主人公なのだろうか。悪玉が善玉に変化<sup>へんげ</sup>するザラストロかもしれない。夜の女王は、あの女帝 maria・テレジアを思い浮かべると納得がいく。アマデウスは、たぶんパパゲーノにちがいない。でも、ザラストロはヨーゼフ二世などをなぞらせることは可能ではあるが、おそらく「音楽の洗礼者」のような概念的イメージの方がウィーンらしい空想となろうか。

古代エジプトが舞台とはいえ、やはり、ウィーンの現実<sup>た</sup>を喩えて観劇すると、ウィーン市民も知らず知らずに、それらしく想像できて思わず大喝采を送ったのだ。連日満員だったという。

どこかで聴いたことありそうな「魔笛」の有名アリア、二つを紹介しよう。

### 『パパゲーノのアリア「おれは鳥刺し」』

<https://www.youtube.com/watch?v=Or5GngtzkMg>

大きな鳥かごを背負い、奇妙な羽毛の服を着た鳥刺しパパゲーノが自己紹介を歌って登場する愉快的民謡調のアリア。もとは当時流行した歌だった。途中にパパゲーノが吹く**パンの笛の音**が入る。

<[http://www.geocities.jp/lune\\_monogatari/zauberflote.papageno.html](http://www.geocities.jp/lune_monogatari/zauberflote.papageno.html)>

### 『夜の女王のアリア（復讐の炎は地獄のように我が心に燃え）』

<https://www.youtube.com/watch?v=lltCcJzwx7E>

女性の高音、ソプラノが歌う「夜の女王のアリア」は、モーツァルトの歌劇『魔笛』の中の1曲で、見せ場のひとつ。数あるオペラの中でもとりわけ超絶技巧が要求される。ソプラノの音域よりも、さらに高いコロラトゥーラ音域でめまぐるしく声をはねる。

夜の女王は姫の母で、娘を宿敵のザラストロに奪われる。オペラの始めにおいて夜の女王は、その悲しみを切々と訴える曲を歌う。ところが場面が変わると、奪われた娘は宿敵ザラストロの味方になっていた。母親は豹変！娘に宿敵を殺せと命じる。そこで歌われるのが夜の女王のアリア。

<<https://www.nhk.or.jp/lalala/archive140628.html>>

ベートーヴェンが「モーツァルトの最上のオペラ」と絶賛し、ワーグナーも「真のドイツ・オペラは、この『魔笛』から始まる」と褒め称<sup>ほめた</sup>えたそう。メルヘンチックでも神がかりの歌劇は、初めてであろうか。これは神話にこだわったワーグナーを刺激して止まなかったはずだ。

## エピローグ

こうして、クラシック巡礼の旅を続けてくると、汗だくで山道を歩いて、雨風になぶられる時があれば、晴天の澄み渡った山波の風景に出会って感動して気持ちが新たになり、次の名山を目指していく勇気が湧いてくる。あたかも、モーツァルト父子のように、何の成果が得られなくても、旅する慣性が止まらない。

アマデウスは、たぶん、死ぬまで旅を続けたものと思えない。ひと時の安息はあったとしても、彼の体内のA Iエンジンは彼の身体をドライブし続けたのだ。

生理学的には、人間の体内で分泌するアドレナリンという副腎髄質が出すホルモンがある。交感神経を刺激するのだが、私はこれを意識することが余りなかった。学生時代に、勉学に嫌気がさしたとき、受験時代に集中したところを無理やりに思い出した。なんとか苦勞しながら心を奮い立たせて挑んだ経験がある。ところが、いったん乗り出すと止まらない。

たとえば、アドレナリン分泌を促したいときには、思い切って、今にも止まりそうなスタートを始める。やるせない気持ちを宥めながら何とか悪戦苦闘して巡航速度に達すると、何もかも忘れて快適この上ない気分走りまくる。そうして、ブレーキかけて一服したいのだが、どうにも止まらない。結果、徹夜して身体が疲弊するまで次から次へと勉強を継続してしまう。喩えれば、新幹線のようなものだ。だから、止めるときには、あらかじめ心に言い聞かせて緩やかに時間を惜しまずに止めないと、巨大な慣性に引き摺られてしまう。不思議な五体の能力である。ただ、自分の体内にアドレナリンを出すための方策が難しい。それに一番なのは、私の場合は書物と音楽である。

アマデウスは、正に、A Iエンジンにおけるアドレナリン・ブースターの起動も停止も音楽だった。この世に生を受けたときから、息絶えるときまで、音楽という豊饒の海を、そのブースター・エンジンのアクセルを踏みながら泳ぎに泳いで、止まらなかった。

父レオポルドもそこまで狙ってはいなかった、いや、意識していなかったはずである。数多の旅により息子の成長を成し遂げた末に、何と息子は一人でロケットふかして、楽曲宇宙の彼方に飛んで行ってしまった。少しは、父にも恩恵がこぼれてくるかと期待しても、何もない。

ところが、私たちにはアマデウスの名曲だらけの楽園が残された。しかも、汲めども尽きない、うっとりとするような6 2 6曲の天地であるから、これらを味わわない手はない。

**FIN** 別当 勉

<参考図書等>

| No. | 題名             | 著者   | 発行元  |
|-----|----------------|------|------|
| 1   | モーツァルトの生涯      | 海老沢敏 | 白水社  |
| 2   | モーツァルト・無常ということ | 小林秀雄 | 新潮文庫 |
| 3   | モーツァルト         | 磯山雅  | 筑摩書房 |
| 4   | モーツァルト 天才の秘密   | 中野雄  | 文春新書 |

<DVD>

|   |           |                   |              |
|---|-----------|-------------------|--------------|
| 5 | 映画「アマデウス」 | 監督:ミロス・フォアマン      | ワーナー・ホーム・ビデオ |
| 6 | 毎日モーツァルト  | NHK「毎日モーツァルト」特別編集 | 東芝EMI(株)     |